
Fate/for the permanent peace

kawajanz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate for the permanent peace

【Nコード】

N4410R

【作者名】

kawajan

【あらすじ】

『Fate/stay night』UBWトウルーエンド後のSSです。

Introduction

我々が生きるこの世界は、絶対にして不変である。しかし、我々が生き得た世界は、この世界とは別に存在している。それが「並行世界」である。

並行世界とは、無限に連なる可能性の世界である。要するに、同じ時系列には属するが、全く異なる世界のことである。自分が男である、女である、金持ちである、貧乏である、幸福である、不幸である、もしくは存在すらしていない可能性、そのあらゆる可能性を内包する世界こそが、並行世界なのである。

ゆえに、この並行世界は、過去・現在・未来に渡り、全ての人間が選び得た全ての運命の数だけ存在するのだ。それも、その運命とというのがどこで分岐しているかは、本人でさえ分からない。我々が気づかぬ内に、世界は多様に分岐しているのである。しかしその分岐点において、我々が取れる選択肢は常に一つだけである。そして、その道を選んでしまえば、決して戻ることはできず、ただ進むことしか許されない。世界は無数に存在しているのも関わらず、我々は一つの世界に生きることしか許されないのである。

ここでとある男の話をしよう。その男という人間の運命は無数に存在する。しかし、その男の運命は一つしかない。彼が進むべき道は一つしかなく、辿り着くべき答えは一つだけである。

その男は、7歳の頃、多くの犠牲者を出した大火災に直面した。目の前で多くの人々が彼に助けを求め、そして死んでいった。しかし、彼は生き残った。

彼はその後、自らを魔術師だと名乗る男の家に養子として引き取られた。そして、その新しい父親の死を見届けると、彼は父の遺志を引き継ぎ、正義の味方を志す決心をする。

そして年月が経ち、彼は穂群原学園の高校二年生となり、三学期が始まって間もない頃、彼は人生をも左右する事件に巻き込まれることとなる。それこそが、7人のマスターと、そのサーヴァントが、冬木市に伝わる第726聖杯をめぐる殺し合いを行う「聖杯戦争」と呼ばれる儀式である。

彼は、とあるきっかけで冬木市では5回目となる聖杯戦争にセイバーのマスターとして参加することとなり、紆余曲折を経て第五次聖杯戦争の勝者の一人となる。そして彼は、この戦争の過程で、一人の女性と出会い、恋に落ちることとなる。さらに彼は、生涯正義を貫き通し、死後も守護者となって世界に奉仕し続ける己の理想が行き着いた自分の姿とも出会うが、彼は己の理想が「多数を救うために少数を切り捨てる」ような無慈悲なものに変わり果ててしまうことを許容できず、両者は衝突して、最終的に彼は、守護者となった自分に打ち勝つ。彼はこの第五次聖杯戦争を通じて、最愛の人を手に入れ、正義の味方としての己の信念と理想を再確認することができた。しかし、一方で、自身の理想が歪で、不透明なものであることを思い知らされこととなった。こうして激動の第五次聖杯戦争は幕を閉じた。そして、彼の新たななる生活が始まったのである。

これまでの彼の人生を鑑みても、奇跡と呼ばれることは何度もあった。確かにその場面において、一つでも違う選択肢を彼が取っていたのならば、今の彼は存在しないことであろう。否、そういう選択肢を取った世界も彼の世界とは別に存在するのである。しかし、彼は数々の困難に直面しながらも、その都度答えを選択し、今の彼に辿り着いたのである。彼という人間の運命は、無数に存在してい

る。しかし彼の辿る運命は一つだけだ。ゆえに彼は、この先の人生も、自らが選ぶ一本の道だけを信じて歩き続ける。

その男の名は衛宮士郎。

これは、衛宮士郎という男の、一つの可能性の物語である。

『Fate/for the permanent peace』

Introduction (後書き)

- * - * - * - * - * -

こんにちは。kawajanzです。

私のサイトで公開中のこのSSを少しずつこちらにも移行して行く
うと思っています。

毎週更新を目指して頑張ります。

私のサイトのほうでは、結構先を進んでいます。続きが気になる方
は、是非サイトのほうにいらしてください。

<http://skybluegeneration.web.fc2.com/>

決意 Side Ring

聖杯戦争も終わり、気づけば今日で高校二年の春休みも終わる。

思い返してみると士郎と出会ってからまだ3ヶ月しか経っていないのに、士郎がこんなにも大切な存在になるなんて思っても見なかった。

今は毎日が本当に楽しい。

士郎の家に泊まって、士郎の作った朝ご飯を食べて、士郎の朝稽古を見て、士郎の作った昼ご飯を食べて、士郎と一緒に買い物に行つて、士郎と一緒に夕ご飯を作つて、士郎に魔術を教えて、ついでに英語も教えてあげて、あとついでにドイツ語も……って、ちよつとやり過ぎかな？でも、これから先必要なんだからしょうがないわよね。うん。そうよね……

それで、お風呂に入って（さすがに、一人で入るわよ。だけど、たまに……）、わたしの部屋で寝る（のは、最初の30分だけで、結局士郎の部屋に行っちゃうんだけどね。だけど、士郎つてば最近生意気なのよ。『なんだ遠坂、寂しいのか？』って、そんなこと聞くんじゃないわよ！寂しいに決まってるじゃない!!）。

そんなこんななの繰り返しだけど、もうこれでもかかってくらい、わたしは幸せです。

はあ、本当に3ヶ月前のわたしが、今のわたしを見たら何て言うかしらね。

でも、しょうがないじゃない。

今のわたしは、士郎なしでは生きていけなくなっちゃったんだもん。

ああもうー、魔術師失格だあー！

ごめんなさい、お父様。

わたしもう駄目です。

死にます。

.....

いえ、死ねません。

士郎を最高に幸せにするまで死ねません。

見てなさい、アーチャー！

士郎は絶対アンタのようにはしないわ。

これ以上ないくらい幸せにしてやるんだから！

決意 Side Ring (後書き)

—*—*—*—*—*—*

こちらでは、サイトで公開しているものを移行していきます。
とりあえず最初のほうは毎週更新で、行こうと思つてます。

この後書きには、サイトでは語つてない小話や設定を載せていこうかと思ひます。

多分にネタバレが含まれることが予想されますので、

ネタバレNGな方は、私のサイトの方で連載を読んでいただくことをオススメします。

サイトの更新情報は、活動報告にてさせていただくことにします。

朝の風景

現在時刻は朝の6時半を回ったところ。俺は台所で、最近も
うすっかり定番になった洋風の朝食を作ろうとしているところなの
だが……………

すう〜ふわあ〜

猫のパジャマを着たゾンビが現れた。

「……………遠坂。はい、牛乳」

「ん。……………ぷはあ。生き返るわ」

やはり死んでいたらしい。

「もういいかげん朝に慣れるよな遠坂」

毎朝同じことを言っている気がするのだが、遠坂が朝に慣れる
気配は一向にない。

「なによ。魔術の研究をするのは夜中が一番いいのよ。それにアン
タ、昨夜はあんなに激しく……………」

ゾンビが悪魔に進化した。

「わかった。俺が悪かった。でもあまり無理するなよ」

「無理してないわよ。なんだかんだで五時間は寝てるし。それより

もアンタよ。昨日だってあの後また魔術の鍛練したでしょ」

「うっ。まあ、そのなんだ。俺のことはどうでもいいんだって」

「よくないわよ。わたしの講義を受けているのに、その後にアンタの無茶苦茶な自主練をしたんじゃ、アンタいつか死ぬわよ」

自主練したくらいで、死にやしないだろ。

「いくら何でもそれは大げさだぞ。俺はただ、その日習ったことを復習しているだけだ」

「復習をするなら、わたしの見ているところでやりなさい。アンタがこのまま自主練を続けてアーチャーみたいになったらどうするのよ。髪が白くなったら、記憶が薄れていいたら、口が悪くなっていいたらどうするのよ。そんなことになったら、わたしは士郎を絶対に許さないわよ」

俺だって、アーチャーみたいになるのは御免被りたい。

「いや……でもさ自主練くらいは……」

「駄目！絶対駄目！今後一切自主練禁止！！」

おいおい………

「ちょっと待ってくれよ遠坂。俺は遠坂とロンドンに行って、迷惑をかけるのが嫌なんだ。だから、少しでも魔術を上達させてだな…

…」

「それで士郎が体を壊したら本末転倒でしょ。士郎がわたしのために頑張ってくれるのは嬉しいけど、倒れられたりでもしたら逆に迷惑よ」

まあ、遠坂が俺のことを気遣ってくれるのは嬉しいんだが…。

「だから、自主練は禁止！」

「いくらなんでもそれはないだろ！それに、遠坂は俺が遠坂の前で必ず魔術を行使しろというけど、いくら遠坂が俺の師匠とはいえ、魔術師としてはどうかと思うぞ。魔術っていうのは、人前で無闇に使っていいものじゃないだろ」

「えっ？」

あれ？案外遠坂動揺してるな。

「士郎、わたしのことそんな風に思ってたんだ」

ん？

「どっという意味だ？」

「士郎にとって所詮私は他人なんですよ」

「なっ！」

「もういいわよ。士郎のことなんて知らない。自主練でも何でも勝手にしなさい！…！」

くそっ。なんてことを言っただ、俺は！！

「待ってくれ、遠坂！俺が悪かった」

「今更遅いわよ」

「それでも、俺が悪かったよ。この通りだ。ごめん」

「別に謝らなくたっていいわよ。士郎とわたしは赤の他人なんですよ」

そんな風に思ってるわけないだろ！！

「俺にとって遠坂は誰よりも大切な存在だ！俺にはもう遠坂のいない世界なんて考えられない！お前のことを愛している。この気持ちは未来永劫変わらない」

「ちよっ！何よ突然！」

「許してくれ遠坂。俺はお前のことを他人だなんて思っただけ」

「わかったわよ。許してあげるわよ。その代わり自主練はやめなさい。どうしてもそれが嫌なら必ずわたしがいる所で自主練しなさい」

「……遠坂。わかった。自主練するときには必ず遠坂を呼ぶよ」

「絶対よ。わかってる？」

「ああ。」

「なら、誓いのキスをしなさい」

「はい？」

遠坂今、とんでもないことを言わなかったか？

「……………」

本気なのか？

「顔赤いぞ」

自分で言っただけで赤くなるなよ遠坂。

「アンタだって赤いじゃない」

そりゃそうだよ。

「いくら遠坂が俺の恋人でも、キスするときは緊張するんだ」

「…わたしだってそうよ」

そうつぶやく遠坂を俺は自分の胸に引き寄せた。そして、彼女の小さな唇に自分の唇を重ねた。

「んっ」

目の前にいるのは、魔術師でも、学園の優等生でもない、俺を好きでいてくれる女の子としての遠坂凜だ。遠坂のこの顔を見れるのは俺だけだと思うと、本当に幸せな気持ちに満たされる。はたし

て俺はこんなにも幸せでいいのだろうか。俺なんかがこんなに…

「士郎？」

「どうした？」

「今、一瞬悲しい顔したでしょ」

さすがに女性は鋭いな。

「いや、何でもないぞ」

「今、何を思ったか言いなさい」

やっぱり誤魔化せないか。

「俺はこんなに幸せでいいのだろうかと思ってさ」

「やっぱりね。アンタの自虐ぶりは常軌を逸してるわ。幸せなら幸せに思えばいいのよ。むしろ士郎はずっと苦しんできたんだから幸せにならなきゃおかしいのよ。それに士郎の幸せはわたしの幸せでもあるの。わたしが幸せになるにはアンタがまず幸せになってくれなきゃ困るのよ」

そうだよな。詳しくは教えてくれないけど遠坂はアーチャーに俺を最高に幸せにするって誓ったって言うってたもんな。

「なんか俺って、遠坂の重みになってるよな」

「なんでアンタはそういう考え方しかできないのよ。士郎がわたし

に気を使えば使うほどわたしの気が重くなるってわからない？」

「わかった。遠坂が気を使わなくてもいいように発言には気をつけるよ」

「全然わかってないじゃない。土郎は言いたいことを言えばいいのよ。アンタはずっと一人で全てを背負ってきたんでしょ。でも、今はわたしがいるじゃない。わたしに全てをぶつけてきていいの」

「そうだな」

俺はなんて幸せなんだろうな。俺は本当にこんなに……

「また同じこと思ったでしょ」

うっ。凶星です。

「そろそろ朝ご飯食べないとやばいんじゃないか？今何時だ、遠坂」
「？」

「あからさまに話逸らしたわね。まあいいわ。今は7時よ。少しま
ずいわね」

「うわっ、もうそんな時間が急いで飯作るから、少し待っていてく
れ」

「とりあえずわたしは顔洗ってくるわ」

「わかった」

登校

「よし。鍵も閉めたし、弁当も持ったし、行くか遠坂」

「……………うん」

遠坂、やけに元気がないな。さっきまでは、いたって普通だったのに。

「どうした？具合でも悪いのか？」

「誰が？」

「遠坂がだよ」

というか、遠坂しか近くにいないだろ。

「えっ、わたし？平気に決まってるじゃない」

やっぱりおかしい。

「それなら、悩みでもあるのか？」

「ないわよ」

「本当か？」

「しつこいわね。どうしてわたしが悩んでると思ってるのよ」

「さつきから遠坂、思い詰めた表情してるしさ、俺が話かけても上の空だから何かあるのかなと思って」

「うそ！わたし、そんな顔してた？」

「この反応は、やっぱり何かあるな。」

「遠坂の返事がなによりの証拠だろ」

「やられた。今は、ブラフだったって訳ね」

「確かに結果的にはそうだけど、遠坂の顔色がすぐれないのは変わらない」

「はあ、アンタって朴念仁のくせしてこういうときだけ鋭いのよね」

微妙に非難されてるよな。

「悪かったな、朴念仁で」

「それは士郎だし仕方がないわよ」

む。少しは否定してほしい。

「それで、何を悩んでたんだ、遠坂？」

俺の質問に驚いた表情をする遠坂。さてはさっきのやり取りで話を有耶無耶にしたつもりだったな。

「なんでもいいじゃない」

その手には乗らないぞ。

「なんでもいいなら俺だってここまで質問しないよ。悩みことがあるなら俺に聞かせてほしい。大切な人が目の前で悩んでいるのに黙って見ているだけなんて俺にはできない」

「なっ！だから本当に大したことないのよ」

全く、強情だな遠坂は。

「わかったよ。そこまで、秘密にしたいなら聞かない。俺はただ、言いたかったことを言っただけだから気にしなくていい」

「……アンタ、言うようになったわね」

どうやら、今回は俺が言い勝ったようだ。

「そうか？俺は遠坂と約束したことを実行したまでだけ」

さっきのちょっとした仕返しも兼ねてだけだな。

「……はあ、本当に悩みつてほどのことでもないのよ。ただ少し緊張しているだけよ」

遠坂の声と表情から察するに、今度は本当だろう。

「緊張？今日って何か緊張することあったか？」

今日は始業式だということを除いたら、普段と大して変わらな

いと思うんだが。

「知らないわよ」

どうやらこれ以上は自分で考えろということらしい。

「遠坂が緊張するなんてな。少し驚きだ」

俺がそう言つと、遠坂はあきれ顔で俺を見つめた。

「わたしは平然としていられるアンタの方が不思議よ」

「なんでさ？」

「……はあ。 土郎を見てたら、なんだか自分が馬鹿らしく思えてきたわ」

俺が何かしたのだろうか？

「そんな惚けた顔してないで、早く行くわよ、土郎」

遠坂の機嫌はよくなったみたいだが、何が何だかさっぱり分からない。

「ほら、早く行きましょ」

まあ、学校に着けば分かることだろうから今気にしてもしょうがないか。

「よし。行きますか」

俺は差し出された遠坂の手をとって、桜舞散る穂群原学園へと
歩を進めていった。

学校

今日は始業式である。そのため、登校時間は普段よりも遅いが、俺たちは普段通りに登校していた。別に俺たちが始業式の登校時間を忘れていた訳ではない。この時間帯なら人目を気にせず登校できるだろうということでも早めに出発したのだ。聖杯戦争が終わり、俺は遠坂の彼氏となったのだが、今まであまり面識のなかった二人が、ましてや学園のアイドルであり幾人もの男子による求愛を悉く断ってきた遠坂凜が俺なんかと付き合っていると、ある日突然恋人同士なるのは不自然だし、あまりにも目立ちすぎるので良くないということから、学校では春休みが終わるまではお互い見知らぬ振りをするということになったのである。そして今日から公然とカップルとして振る舞えるようになった。ただ、初日ということもあり、少しは人目を憚ろうということになったのだ。

「そうか。それで遠坂は緊張してるのかもな」

それにしても表面に現われるほどの緊張を、遠坂がそんな理由ですとは思えない。前の学期でも、遠坂の方から約束を破って接触してくることが多々あったし、休みの日に堂々と二人で街中を歩いたりもしていた。それにもかかわらず、今更緊張する必要がないように思う。

「やっぱり、変だぞ。遠坂」

「遠坂の何が変なんだ、衛宮？」

「美綴！！」

「よっ。お二人さん、仲がいいね」

「なんで、美綴がここにいるんだ？」

「いちゃ悪いのか？あたしや、ここの生徒なんだがね」

「いや、そういう意味じゃなくて、なんで美綴はこんなに早く登校してるんだって話だよ」

これはまずいヤツに会ったな。美綴は俺たちのことを言いふらすようなヤツじゃないけど、当分の間はからかわれることだろう。

「アンタらにちよっかいをだそうかと思ってさ」

俺たちが早く登校するのを知ってたのか？

「……っていうのは嘘で、新入部員勧誘で朝早くから登校している後輩達にアドバイスしてやろうと思ってさ」

なんだ、そういうことか。

「しかし、あの遠坂が衛宮とねえ。案外、ありえなくもないか」

「確かに、まさか俺も遠坂と付き合うことになるとは思わなかった
「よ」

俺の言葉を聞くと、美綴はニヤリと口元を歪ませた。

「要するに、衛宮と遠坂は付き合っているわけだ。」

あつ……しまった。

「あはは。安心しな、衛宮。アンタと遠坂が付き合ってるのは、アンタらが一緒に歩いてる時点で気付いてたから」

「なんでさ?」

「なんでって、遠坂は男と二人っきりでなんか絶対一緒に歩いたりしないじゃない?」

確かにそうかも……

「まあ、最近の間桐の様子を見てて、衛宮に何かあったことには気付いてたけど、そうゆうことだったんだな」

「間桐? 慎二がどうかしたのか?」

「あのね。あたしが間桐って言ったら妹の方だよ」

「桜?」

俺が桜に何かしたのか? 余計に混乱してきた。

「はあ、もうここまで朴念仁だと、すごいとしかいいようがないわ。ねえ、遠坂?」

「……………」

美綴が話かけても遠坂は、まるで銅像のように立ったままびく

りとも動かない。

「こりゃ、石像だな。」

「同感。それより……おい、遠坂。」

遠坂は、俺が揺すっても一点を凝視したまま凝固してしまっている。

「おいっ。どうしたんだよ、遠坂」

俺がそう言うと、やっと遠坂は反応して、虚ろな目で見つめ返してきた。

「……あった」

遠坂はそう呟いたのだが、なんのこともかさっぱり分からない。

「何があっただ？」

「そんなの決まっているじゃない!?!」

そんなことを言われても、残念ながら分からない。

「まだ、分からないの? あったのよ、名前が!」

「名前?」

「同じ組にわたしとアンタの名前があったの!?!」

「なるほど。クラス替えか」

「そう言えば、さっき見たけど、衛宮と遠坂もあたしと同じクラスだったな。」

美綴も同じクラスか。これはまた、充実した一年がおくれそうだな。

「って、綾子！なんでアンタがいるのよ。」

「あたしは随分前からいるよ。な、衛宮？」

「ああ」

遠坂はきょとんとした顔をした。

「嘘よね？」

「あたしが嘘について何の得があるって言うんだい？」

「うっ」

「まさかあの遠坂凛が、恋人と同じクラスになれるかどうかで一喜一憂する乙女になるとはね」

なるほど、遠坂が緊張してたのはそういう理由があったのか。

「あら、美綴さん。アンタから私が見えるのなら、賭けはわたしの勝ちということでもいいかしら」

「いや。まだ、負けと認めるには早いね」

「往生際が悪くてよ、美綴さん」

二人が何のことについて話しているのかさっぱり分からない。

「なあ、賭けって何なんだ？」

「ああ、先に彼氏を作って、相手に羨ましがられる関係を築いたほうが勝ちっていう至極単純な賭けなんだけど、まだあたしは衛宮と遠坂がラブラブなところを見てないじゃない？まだ、負けとは認められないな」

「なるほどな。……って、もしかして賭けで勝つために俺と付き合い合うことにしたのか？」

俺は心にもないことをあえて口にしてみた。すぐに遠坂が否定してくれることを信じて。

「馬鹿なこと言うんじゃないわよ。付き合いだけが目的ならどうしてアンタみたいな朴念仁で唐変木で無神経で浮気者をわざわざ彼氏にしなくちゃならないのよ」

さすがにそこまで言われるとへこむぞ、遠坂。散々な言われようなので、もう少しからかうことにした。

「わかったよ。遠坂は俺のことが好きでもないのに付き合い合ってくれてたんだな」

「なっ！そんなわけないじゃない。半端な気持ちであなたと付き合ってるって、士郎は本気で思ってるの？そんなんだったら、あなたと一緒にロンドンに留学したいだなんて言いださないわよ！！」

やばっ！

「遠坂！気持ちはすごく伝わってきて嬉しいんだけど、さすがに今のはまずいだろ」

俺がロンドンに留学することは、まだ藤ねえにも話していないト
ップシークレット事項だ。

「あっ……」

「俺だってお前のことを愛してるんだ。遠坂が俺のことを好きでいてくれることを信じているに決まってるだろ。さっきは賭けの話がでたから少しからかっただけだよ」

「士郎……わたし、とんでもないこと言っちゃった……」

遠坂は顔面蒼白でそう呟いた。

「確かに遠坂の発言は迂闊だったな。ただ、幸い聞いていたのが美綴だけだったから、まあぎりぎりセーフだろ」

聞いていたのが美綴だけで本当によかった。美綴は義理堅い人間だ。人の秘密を決してベラベラ人に話したりはしないだろう。

「いや、衛宮。アウトだったかも知れない」

何か嫌な予感がする。

「どつという意味だ、美綴？」

「さっきの話、たぶん間桐も聞いていたぞ。間桐のヤツが、木陰から走って逃げていくのが見えた」

参ったな。留学の話は藤ねえにすら打ち明けてない話であって、もちろん桜にもまだ伝えていない。

「綾子！桜はどこに走って行ったの？」

「どこかまでは分からないけど、弓道場の方向だったな」

遠坂は、みなまで聞かずに弓道場の方へ駆けていった。

「おいっ遠坂！……くそっ行っちゃまった」

「悪い衛宮。あたしが面白がって遠坂をからかったせいだな」

「いや、美綴のせいじゃないよ。からかったのは俺も一緒だし、元はと言えば留学の話を桜にしてなかった俺が悪い。それに、留学の話はいつまでも秘密にしておくような話じゃない。いずれ桜にも話す日は来たんだから、その日が早まったただけだ」

俺がそう言うと、美綴は顔をしかめた。

「衛宮。これはそんなに単純な話では済まないかもしれない。アンタがどう思うかは知らないけど、失恋っていうのは相当堪えるものなんだよ。自殺するヤツも出るくらいね」

失恋？何の話だろう。

「あたしはこれ以上言わないよ。アンタが気付いてあげなきゃ意味がないから。ただ言えることは、早く気付いてあげなきゃ取り返しのつかないことになるかも知れない。それだけは覚えときな。あたしもなるべくフォローはするけど、ほとんど無意味だろうからね」

分からない。美綴はいつたい誰の話をしているのだろうか。

「美綴、お前は……」

「これ以上あたしから言うことはないよ。早くアンタの愛する人を追ってあげな」

愛する人を追う。そうだ、俺は遠坂を追わなくちゃならない。どうして？それは、遠坂が桜を追って行ってしまったからだ。どうして桜は逃げたんだ？桜が俺たちの留学を知ってしまったから……知ってしまったからって桜はどうして逃げる必要がある。待てよ、美綴の言ったことを思い出せ。失恋……

「失恋って、桜なのか？」

「さあね」

「なんだよ。問題提起しておきながら手厳しいな」

「まあね。ただでさえあたしが誘導尋問したみたいなんだから、答えくらいは衛宮自身が出しなよ。あたしは、根が優しいアンタなら、大団円を迎えられるって信じてるから」

「答えを教えてくださいない上に、プレッシャーまでかけてくるのか。お前、意地悪いな」

美綴はからからと笑い声をあげて、言った。

「そりや当たり前ですよ。あたしの熱いラブコールを無視し続けるヤツに、優しく接するなんてできるかよ」

そのわりには、ヒントをくれたりと優しくすぎるけどな。

「とにかく、今のアンタがやることは、遠坂を追うことだよ」

「そうだな。ありがとう、美綴」

「礼を言うのはまだ早いよ。全てが無事に解決したらあたしの言うことを聞いてもらうから、今はやるべきことをやりな」

それは恐ろしいな。

「じゃあ、礼は全てが終わった後までとっておくよ」

「ええ。そのかわり、アンタはアンタの納得のいく答えを必ず見つけてこい」

「ああ。必ず……………」

美綴と握手を交し、俺は遠坂が向かった方向に歩きだした。

衝突く side Ring

わたしは桜を必死に探した。そして、弓道場の裏手でついに発見した。

「桜!！」

「遠坂先輩……」

「桜。留学の話はまだ正式に決まった訳じゃないの。だから……」

「遠坂先輩、いいですよ。わたし、先輩と遠坂先輩が付き合っているのは知っていましたし、留学の話だってよく考えれば当たり前のことですよ。それにわたしは、先輩と遠坂先輩はお似合いのカップルだと思いますよ。絶対幸せになれます。だから、わたしのことを気にする必要はこれっぽっちもないですよ」

「桜……確かにわたしは士郎を愛しているわ。でも、桜から士郎の全てを奪おうとは思っていないわ。わたしは士郎を幸せにする。だけど、士郎を幸せにするには貴女が必要な。だってわたしたち……」

「それ以上は言わないでください。先輩は遠坂先輩がいれば十分幸せになれますし、遠坂先輩も幸せになれます。それにわたしは、間桐桜ですから」

桜……そんな……

「では遠坂先輩、わたしはこれで失礼します」

「待つて桜!」

「さようなら遠坂先輩。お幸せに……」

「桜!」

とじり

「……あ……あ……」

士郎……とじり……

呪い

弓道場の裏手で、うずくまる遠坂の姿を見つけた。

「……遠坂」

俺が呼び掛けると、遠坂は虚ろな目をしてこちらを見上げた。

「大丈夫だ」

なぜそう言ったのかは分からない。ただ、遠坂を見ていたらそれしか思い浮かばなかった。

「わたし……やっぱりバカだ」

「大丈夫だって、遠坂」

「どうしてそんなことが言えるのよ」

「お前は遠坂凜だ。お前の選択が間違っているはずがない」

「そんなの……根拠でもあるわけ？わたしはね、ここぞという時に取り返しのつかない失敗をするのよ。それは士郎も知っているじゃない」

「ああ知ってる。確かにお前は大切な時に大ポ力をやらかすのかもしれない。でも、それが間違っていたことがあるか？」

「どづい意味よ」

「聖杯戦争覚えてるよな」

「当たり前じゃない」

「なら、あの外人墓地での独り言も覚えているだろ」

「……………」

俺はセイバーをキャスターに奪われ、遠坂はアーチャーに裏切られた。そして、あの外人墓地で遠坂は俺に自分の心情を語ってくれた。稀代の魔術師遠坂凜が、人間遠坂凜としてはじめて俺に内側を見せてくれた瞬間だった。俺はあの時のやりとりを一生忘れないと思う。なにせ、俺が遠坂に告白したのがあの時だったからな。

「遠坂は確かにここぞというときに失敗をするかもしれない。けどそれは、ただの失敗であって遠坂の選択が間違っているわけじゃないんだ。お前は失敗した分、その失敗を何倍・何十倍で相手に仕返すだろ。桜も気の毒だよ。桜は遠坂を突き放した分、きつとその何十倍の仕返しをされるからな」

魔術に関してはド素人の俺がセイバーなんかを召喚してしまったために、俺は遠坂のとんでもない仕返しを受ける羽目になった。なにせ、俺はもう遠坂なしでは生きていけないようになってしまったのだから。

「だから、遠坂凜は恐ろしいんだ。お前を倒すためには、仕返しができるいほどにポコポコにしなくちゃならないんだからな。さもなくば、お前の呪いに犯されて、一生付き合わされる羽目になる」

「そうね。アンタを手放すことは、絶対にありえないから」

ああ。俺はもうお前のものだ。そして、俺もお前を一生手放さない。俺のそばには遠坂がいて、遠坂のそばには俺がいる。これは呪いだ。エミヤシロウにとって最強で最凶の呪い。しかし、衛宮士郎にとっては最高で最幸の呪い。俺の人生は遠坂凜という人間が入ってきたことでがらりと一変した。そして、それこそが衛宮士郎の運命の最大の分岐点だったのかもしれない。

「なら、桜もみすみす手放すつもりはないんだろ。お前はきつと桜を一生許さない。桜がこれ以上ない幸せを勝ち取るまで、お前は桜を呪い続けるんだ」

「ええ。そうね。わたしはアンタも桜も一生許すつもりはないわ。わたしの魔術師としての人生を台無しにしてくれたんですもの」

「ああ。それでこそ、俺の知る遠坂凜だ」

「わたしが悪かったわ。あの外人墓地でも言ったように、わたしは後悔はしたくないの。ううん、しないの。だったらこんなところでいつまでも燻っているわけにもいかないわね」

「ああ」

やっぱり遠坂凜は眩しい。

「よし。そうとなれば今日は家に帰りましょ。なんだかいくら始業式だけでも学校にいたいっていう気分じゃないわ」

「そうだな。きつと、藤ねえには「びつどく叱られるだろうけど、

藤ねえと桜の分の弁当を置いて、今日のところは帰るとするか」

「ええ」

「なんだよ遠坂、ずいぶんと機嫌がよくなったな」

「誰の所為よ」

「わからないな」

「……バカ。もう知らない」

ぶんとわざとらしく振り返って、遠坂は正門の方へ歩いていった。

「やれやれ、赤い悪魔様の御乱心が収まって、臣下としては一安心ですぞ」

誰にも聞こえない声でそうつぶやいて、俺は彼女の隣を歩くべく、最愛のパートナーの元に駆け寄ったのだった。

不安

俺たちは衛宮家に帰ってきた。藤ねえに帰ることをメールで送ると、嫌味つらみが多分に含まれているものの、弁当を運んだことに免じて今日のところは許すというものだったので、とりあえずは「安心である。」

「とりあえず昼飯は弁当でいいとして、夕飯は何がいい？」

「ん？わたしは何でもいいわよ」

「そうか。えっと、藤ねえは忙しいから今日は来れなくて、桜は…
…まあ来ないよな。じゃあ二人分か」

「二人きりなのに、全然嬉しくないわ」

やはり、気持ちの整理はついたとは言えども、桜に突き放されたことは相当堪えているのだろう。

「まあ、あんなことがあった後だしな」

「士郎に朴念仁って散々言っというて自分がこれじゃあわけないわよね」

俺の場合は遠坂とは違って自覚がないっていうおまけ付きだけだな。

「そんなに考えたって仕方がないだろ。遠坂凜は後悔をしないんじゃないかったか？それなら、前に向かって進むしかないだろ」

「そうなんだけど、でも………」

「らしくないな、遠坂」

遠坂は桜と仲違いをする以前も、桜の話題のときに何とも言えない寂しげな表情をすることがしばしばあった。魔術師として人の接点をなるべく断ってきた遠坂だが、桜に対しては並ならぬ感情がどうもあるらしい。

「桜がお前にとって大切な人だっていうなら、尚更落ち込んだる場合じゃないんじゃないのか？もう済んでしまったことをあれこれ悩んでも事が解決するわけでも何でもない。本当に桜のことを想っているなら、今は桜とどう仲直りをすればいいのかを考えるべきだと俺は思うぞ」

「分かってはいるの。やるべきことはわかっているのよ。だからこそ不安なの。もし、桜と仲直りできなかつたらどうしようって、後悔なんかしたくないのにどうしてもそう思ってしまうのよ」

「それは後悔じゃないよ、遠坂」

「えっ？」

「遠坂も自分で言ったじゃないか。お前が抱いてる感情は不安なものだ、いやもしかしたら愛情って言い換えた方がいいのかもな」

俺は遠坂が落ち込んでいるのかと思っていた。でもそれは違った。それを遠坂の言葉で確信した。遠坂凜は、やっぱり遠坂凜だ。

「お前は自分で不安っていったけど、不安っていうのは後悔とは似て非なるものだ。遠坂は桜を傷つけたくない。桜との関係をこれ以上悪化させたくない。お前はそう思ってる。それは、過去の失敗を悔やんでいつまでもくよくよしているような後悔とは違う。お前はしっかり前を向いている。未来に向かって進もうとしている。未来を見据えた上で悩んでいる。確かに前向きではないのかもしれない、それでも後ろはもう気にしてないだろ。過去があるから、未来に進めるんだ。それとは反対に、過去に囚われているヤツは未来には進めない。遠坂凜は辛く重い心を背負いながらも一生懸命前に進もうとしている。だからこそ、道の先にある障害物に目がいくんだ」

きつと、遠坂はもうそのことに気づいているんだと思う。それを心が否定しているだけなんだと思う。だから、俺にできることは遠坂を前に押し出してやることだけだ。

「障害なんて気にすることはない。お前は、どんな障害だって乗り越えられる。今までだってそうだっただろ。聖杯戦争だって、絶体絶命の窮地からこれ以上ないほどのハッピーエンドで終わらすことができたじゃないか。お前は逆境でこそ力を発揮する。それは、お前の恋人である衛宮士郎が保証する。それに、お前は独りじゃない。遠坂にも越えられない壁があるなら、俺がお前を全力で支えて、二人の力で越えていこう。俺たちに越えられない壁はない。だから道の先にある障害物なんて気にする必要はない。お前は自分を信じて、前に向かって歩いていけばいいんだ」

「……士郎。わたしの完敗かも。悔しいけど、アンタがずっと側にいてくれるって思ったなら、なんでもできるような気がする。結局わたしは、自分が独りになってしまふのが怖いだけなのかも知れない」

独りになる恐怖。それは俺にも分かる。

「そうだな。独りになるっていうことほど怖いものはないのかもしれない。十年前の大火災で俺は呆然と立ちつくしていた。家も両親も自分さえも失って、何もなくなって俺は独りになった。自分が誰かすらも分らない、ここがどこかすらも分らない。あの時の俺には、目の前に広がる光景への恐怖だけがあつた。家は跡形もなく崩れ去り、人々が苦しみの声を上げながら俺に助けを求めてくる。俺は完全に独りだった。助けを求めるとも出来ず、助けに応じることもしない。何も出来ない。それが怖かった。怖さのあまり何も出来なかつた。俺はいつたい何者なんだろう。もう何が何だか訳が分からなくなつて、とにかく怖かつた。恐怖だけがそこにあつた。そんな俺の目の前に、突如現れたのが親父だった。嬉しかった。誰かがいることが本当に嬉しかった。独りじゃないっていうことだけで、俺は心から救われた気持ちになれた。それが、あの時感じた素直な気持ちだつた」

そのときの気持ちこそが、今の俺の原動力になっていることは間違いない。独りになるのが怖い、だから人の役に立つことをやって少しでも誰かと関わっていたい。そんな気持ちが俺には少なからずあるのではないだろうか。

「遠坂が感じている恐怖っていうのは、そう簡単に克服できるものじゃない。遠坂にとつては、今まで何でも一人でやって来たっていう自負があるから尚更なのかもしれない。今、お前の側には、俺とか桜とか美綴とか大切な人が沢山いるだろ。そんな状況が幸せで仕方がないんだろ。だからこそ、誰かが自分の前からいなくなるのが怖い。遠坂はそう思ってる。違うか？」

「……うん。その通りかもしれない」

「なら嬉しいな」

「えっ？」

「遠坂が独りになるのが怖いと思ってるってことは、俺たちのことを大切に想ってくれてるってことだろ？俺はそれが嬉しい。俺も遠坂や桜のことが大切だから、俺を大切に想ってくれてることがすごく嬉しいんだ。その気持ち伝わってくるだけでも本当に嬉しい」

人と人のつながりというものは、目に見えるものではない。それでも、心で感じ取れることはできる。

「遠坂は桜のことを本当に大切に想ってる。だから、桜が自分の前からいなくなることが怖いんだ。だけど、遠坂が心の底からそう思ってるのならその恐怖は遠坂にとって強い力になる。桜を失いたくないっていう強い思いが、きっと遠坂を奮い立たせて、桜の心を動かすだろうから」

これで俺が言いたいことは全て言い切った。後は遠坂次第だろう。

「……バカ」

今にも泣き出しそうな声で遠坂はそう呟いた。

「士郎にまた泣かされた」

いや、全くそのつもりはなかったんだが……

「いや、ごめん」

「謝ってほしくなんかない。わたしは、土郎の気持ちが嬉しくて泣いてるんだから謝るな、朴念仁。それに、こっちを向いたら許さないわよ」

全くコイツは素直じゃないな。

「わかったよ。しばらく側に居てやるから、落ち着くまで泣いていいよ。俺は向こうを向いてるから、俺の背中でも胸でも何でも使えばいい」

俺がそう言うと、遠坂は俺の背中に背中を合わせて座った。話しかけたりはしなかった。いや、話しかける必要がなかった。背中を通して遠坂の体温がこちらに伝わってくる。それだけで俺の心は満たされていた。しばらくの間、俺たちは無言でお互いの気持ちを確かめ合っていたのだった。

発現

遠坂と背中合わせに座ってから30分が経った。

「ありがとう、士郎」

恥ずかしそうに遠坂が言った。

「どういたしまして。さてと、ちょうど昼飯の時間になったな。弁当でいいよな?」

「ええ」

「よし。今持ってくるから少し待って…っ!」

唐突に全身を激痛が走った。

「どうしたのよ、しろ…痛っ!」

「なんだ!?!」「なに?」

声が重なって遠坂と顔を見合わせる。

「士郎、左手の甲!?!」

自分の左手の甲を見ると、見覚えのある紋章のようなものが浮かび上がっていた。

「令呪か?」

あまりにも突然の出来事で、脳の情報処理能力が追い付いていない気もしたのだが、俺が自分の左手の甲に現れている模様を分析した限りでは、令呪に間違いなかった。

「うそ…わたしにもある。」

確かに遠坂の右腕を見ると令呪らしき模様がくつきりと浮かび上がっていた。

「包帯買わないとまずいな」

訳が分からなくなっ、無意識のうちに俺はそう呟いていた。

「何馬鹿なこと言ってるのよ」

怒られた。

「それにしてもどうして令呪が発現してるんだ？」

「知らないわよ！…！」

怒鳴られた。

「また聖杯戦争でもはじまるのか？」

「だから知らないって言ってるだろうがああああー！ー！」

激しく怒鳴られた。

疑問

「落ち着いたか？」

「落ち着いたわよ」

まあ、突然発現した令呪を見て取り乱すのは仕方がないが、遠坂のあまりの形相にここ2・3分生きた心地がしなかった。

「それで改めて聞くけど、どうして令呪が現れたんだ？」

「それが本当に分からないのよ」

「そもそもこれは本物の令呪なのか？」

「間違いなく本物よ。魔力の流れを感じるし、感覚自体があ有的时候と同じなもの」

確かにそう考えると本物だと判断せざるをえない。

「それなら、また聖杯戦争がはじまるってことか？」

「普通に考えればそうだけど、いくら何でも間隔が短すぎるわよ」

「そうだよな。なあ、そもそも聖杯戦争ってどうやって起こるんだ？」

俺は聖杯戦争のことを知っているようで知らない。この際だから聞けることは聞いておこう。

「そうね。ここで聖杯戦争のおさらいをするのも悪くはないわね。もしかすると何か分かるかも知れないし」

遠坂はどこからともなく眼鏡を取り出して、講義モードに突入した。

聖杯戦争

「まずはそうね、士郎が分かる範囲でいいから聖杯戦争について説明してちょうだい」

聖杯戦争の説明か。俺は言峰教会でのアイツとの対話を反芻した。

「聖杯戦争とは、七人のマスターが七人のサーヴァントを召喚し、冬木に現れると言われる聖杯をめぐって殺し合いを行う儀式のことだ。七人のマスターは聖杯によって選定され、マスターは英霊と呼ばれる最高ランクの使い魔を降霊し、サーヴァントとして使役する。サーヴァントの召喚にはその英霊にまつわる聖遺物を触媒とする必要がある。マスターにはサーヴァントに対する三つの絶対命令権“令呪”が与えられ、令呪が存在する限りマスターは聖杯戦争から逃れる術はない。……と、こんなところか」

「ええ。士郎にしては上出来よ。ただ所々が正式には間違っているわね。例えば、マスターを選定し、サーヴァント召喚のためのマナを集めているのは聖杯ではなくて、大聖杯と呼ばれるものなの。聖杯と大聖杯の何が違うかって言えば要するに、聖杯って言うのは望みを叶えるために一時的に必要なマナを集める器で、大聖杯っていうのは望みを実現するための術式、つまり聖杯戦争のシステムそのものってわけ」

ちょっと待った、その話は初耳だ。

「つまり、聖杯とは別に大聖杯が存在しているってことか？」

「そういうことよ」

「遠坂、それってつまり……………」

「あつ……………」

聖杯を壊しただけでは聖杯戦争は終わらないってことなんじゃないのか。

「大聖杯を破壊しない限り聖杯戦争が続くってことだよな」

「……………」

「どうしてこんな大事な話を、あのときにしなかったんだよ」

「しょうがないじゃない。大聖杯の役割は、サーヴァント召喚用のマナを集めることとマスターの選定を行うくらいのことしかないのよ。まさか誰も聖杯戦争の時に大聖杯のことなんて気にするようなヤツなんていないのよ」

「つまり、大聖杯の存在すらあのかぎりは忘れていたと」

「……………」

凶星だな、これは。

「まあ、済んでしまったことは仕方がないし、先のことを考えよう。今回の聖杯戦争で俺たちがやるべきことは、その大聖杯ってものを壊すことでもいいんだな」

「……………そういうことになるわね」

待てよ、大聖杯のことを遠坂が知ってるってことは……

「もしかして、遠坂は大聖杯の在処を知っていたりしないか？」

「大聖杯の在処？……えっと、確か円蔵山の地下空洞にあるのかな
いとか」

「それを今すぐにでも壊しに行けばいいんじゃないのか？」

遠坂は一瞬茫然自失といった表情をしたが、はっと正気に戻って答えた。

「それは無理ね。普段の大聖杯には、どんなに優秀な魔術師が何十人がかりでかかっても破れないよな結界が張つてあるのよ。到底わたしたちには破壊できっこないわ」

「そうか。でも遠坂は普段って言ったよな」

「ええ」

「それはどういう意味だ？」

「実は聖杯が起動しはじめると大聖杯も起動をはじめの。そのときに結界があつては大聖杯と聖杯が影響し合うことができなくなるから、聖杯起動時のみ大聖杯の結界はなくなるのよ」

「つまり、聖杯起動時が大聖杯破壊の唯一のチャンスってわけか」

「ええ」

聖杯の起動が大聖杯破壊の絶対条件となる。やはり、聖杯戦争で俺たちが勝ち残らなければならぬということか。

「ところで、聖杯の起動って何体ぐらいのサーヴァントを倒せばいいんだ。やっぱり6体か？」

「いいえ、それなりのマナが聖杯に溜まれば聖杯は起動しはじめると思うわ。そうね、だいたい4体以上かしらね」

「4体か……。俺と遠坂のサーヴァントを除いて残るは5体。その内4体を倒せばいいというわけか」

「最低線がその辺りでしょうね。簡単にはいかないと思うわ」

「そうだな。まあ、敵の強さにも依るけどな」

「その点なら、今回の聖杯戦争はわたしたちが有利かもしれないわね」

「なんでさ」

「前回の聖杯戦争と今回の聖杯戦争は間隔が短すぎるでしょ。それならば、マスターだって聖杯戦争の準備を整えることができない。それに前回の聖杯戦争でマスターだったイリアスフィール・葛木・エセ神父は死んでしまったし、慎二も聖杯戦争に参加できるほど体が回復していない。実質前回の聖杯戦争を経験しているのはわたしたちだけなのよ。よって、今回のマスターはわたしたちを除いて新参加者である可能性が高い」

確かに遠坂が言う通りになれば、俺たちは俄然有利な立場にいることになる。

「ただ、聖杯戦争は必ずしもそう上手くいくものでもない」

「ええ、その通りよ」

前回の聖杯戦争、最後こそは帳尻を合わせることができたが、俺たちの予想することが的中することはほとんどなかった。自分たちが相手の裏をかこうとするならば、相手も然りというわけだ。戦争は騙し合いだと彼の孫子も説いているが、まさにその通りだと実感した。やるかやられるかの命を賭した戦いにおいて、一瞬の気の緩みが死に繋がりかねない。不測の事態に常に備える姿勢を忘れてはならないのである。

「ともかく俺たちはマスターに選ばれたんだから、相手が誰であれ全力で迎え撃つしかない。そのためにも万全の準備を整える必要があるな」

「そうね。しかし、なんでこの時期に聖杯戦争が起こるのよ。今までの聖杯戦争は常に冬だったって父さんの手記には書いてあったし、本来の聖杯戦争の周期は60年なのよ。いったい何なの今回の聖杯戦争は、季節は春で前回の聖杯戦争が終わってから2ヶ月ぐらいしか経っていないじゃないの」

「そうだよな。あまりにも聖杯戦争が起こるにしている間隔が短すぎる。」

「でも、第4次聖杯戦争と第5次聖杯戦争の間隔もたったの10年だろ。周期の話をするなら前回の聖杯戦争でとくに狂いはじめて

るんじゃないのか？」

「そういえばそうね……あのときわたしは周期が早まってラッキー
としか思わなかったけど……周期か。通常が60年、前回は10年、
今回が2ヶ月。これもしかして……」

遠坂の表情が一層険しくなっていく。

「遠坂、何か分かったのか」

「……ええ。もしわたしが考えたことが正しいとすると、非常にま
ずい事態が起こってるかもしれないわ」

「説明してくれるか」

「少し待って、整理がついたらゆっくり説明するわ」

「わかった。それなら俺は弁当の用意をしてくるよ」

「ええ。お願い」

大聖杯

昼食を食べ終わり、遠坂の話聞くべく茶と紅茶を用意して居間に腰を下ろした。

「話は纏まったよな、遠坂」

「ええ。事実かどうかは分からないけど、信憑性が高い話にはなっ
たわ」

「話してくれるか？」

少しの間をおいてから、遠坂は説明をはじめた。

「大聖杯の役割には、マスターの選定とサーヴァント召喚用のマナの収集があることは話したわよね。後者の方だけど、通常サーヴァント召喚に必要なマナを集めるには60年の年月がかかるのよ」

サーヴァント一体を召喚するだけでも莫大なマナを集める必要がある。60年というのは妥当な数字だろう。

「それにもかかわらず、第4次聖杯戦争と第5次聖杯戦争の間隔は10年しかなかった。これはどうしてだと思う？」

60年かかるものが10年でできたしまうとなると……

「なんらかの要因、例えばアンリ・マユが原因で周期が早まったとか……」

「ええ。わたしもはじめはそう考えていたわ。でも、それだと前回と今回の2ヶ月という周期がどうしても説明できないのよ。いくらアンリ・マユが大聖杯のマナ収集能力を向上させてるといつても、2ヶ月でサーヴァント7体分のマナを集めるなんて不可能なのよ」

なるほどな。確かに10年だったら可能性はあるかもしれないが、2ヶ月はさすがに無理だよな。

「それなら、どうやって集めているんだ？」

「そうね。じゃあ、それを説明するために簡単な問題を出すわ。通常の聖杯戦争の周期が60年だとすると、大聖杯が1体分のマナを集めるのに何年くらいかかるでしょう？」

60年でサーヴァント7体分のマナを集めるわけだから……

「だいたい8年と半年ってところか？」

「正解。それなら、第5次聖杯戦争をはじめるにあたって、大聖杯が集めたマナの総量はさつきと同じように考えるとサーヴァント何体分になるでしょう？」

1体が8年と半年かかるわけだから……

「1体分とちよっとつてところか」

「そういうこと。それじゃあ、今回は？」

「まあ、1体分も集めてないよな」

「そう、それがわたしの出した推論を導き出すためのヒントよ。どう、何かに気づいた？」

遠坂が言っていたことを纏めると、通常大聖杯がマナを集める周期は60年で、それを1体あたりに換算すると8年と半年ほどになる。第4次聖杯戦争と第5次聖杯戦争の間隔は10年だったため、先ほどの計算だとサーヴァント1体とちょっと分しかマナを集めていることにはならない。それが第5次と今回だと、1体分にも満たないか。……これだけじゃ、遠坂が何を言いたいのかわからないな。

「悪い。まだ、わからない。もう少しヒントをくれないか」

「そうね。なら、とっておきの大ヒントをあげるわ」

「……遠坂にしては、やけに優しいな」

「アンタね。そうでもしなきゃ、日が暮れるでしょ」

ぐっ……さすがに今は堪える。

「落ち込んでるんじゃないわよ。それなら、次のヒントで気づきなさい」

「よし。望むところだ」

「わたしも詳しいことは知らないんだけど、第1次から第3次聖杯戦争までは遠坂・マキリ・アインツベルンの三者が一步も譲らずに長期化して、聖杯の召喚は試みたらしいんだけど結局聖杯が発動しないまま終わっただけなの。でも、第4次聖杯戦争は違った。その

違いは分かるでしょ」

「セイバーがマスターの命令で聖杯を破壊した」

「そう。そして、その際に言峰綺礼のサーヴァントとして現界していたギルガメッシュは、聖杯を浴びて現世への受肉を果たした」

その10年後、第5次聖杯戦争が勃発することとなる。

「……そうか！第4次と第5次聖杯戦争の周期は10年。大聖杯が10年分のマナを集めたということは、逆に大聖杯には10年分のマナが不足していたと考えることができる」

「そうよ。その不足分っていうのが金ぴかだと考えれば、全ての辻褄が合うわ」

「ちょっと待て、遠坂。確かに10年分のマナがギルガメッシュのマナ量かもしれないことは分かる。だけど、それなら大聖杯は残りの50年分のマナをどうやって集めたっていうんだ？」

「さつき士郎は、第4次聖杯戦争とそれまでの聖杯戦争の違いは、セイバーが聖杯を壊したことだって言っただわよね」

「ああ」

「つまりそれが答えなの。セイバーが壊した聖杯の中には、5体分のサーヴァントの魂が保管されていた。それをセイバーが破壊した。すると、聖杯の中に集まっていたマナとセイバーの分のマナは行き場を失った。そのため、聖杯が起動により聖杯とパスが繋がっていた大聖杯に行き場を失ったマナが一斉に流れ込んだ。それがギルガ

メシユ分のマナ量を除いた50年分のマナに相等するってわけ」

そして、大聖杯は不足分である10年分のマナを集めるだけで済んだってことか。

「なるほどな。だけど、それがたまたまそう説明できるって可能性はないのか」

「ええ。今の説はあくまでわたしの推論だから、絶対に正しいという保証はないわ。でも、前回と今回の間隔を考えると余計に信憑性が高くなると思わない？」

前回の聖杯戦争は第4次聖杯戦争と同様、セイバーが聖杯を破壊することで決着している。さらに、第4次聖杯戦争後も尚現界し続けたギルガメシユも俺との戦いの後、黒い孔に飲み込まれ消滅した。

「セイバーが聖杯を壊したことによってサーヴァント7体分のマナが行き場を失ったにもかかわらず、加えてギルガメシユのマナも大聖杯に流れ込んだってことか。ゆえに、大聖杯が貯蔵したマナはサーヴァント8体分。つまり、その時点でいつでも聖杯戦争ができる準備は整ったというわけか」

「そういうこと。そして、この推論が正しかったとしたら事態は一層深刻になってくるわ」

「聖杯を破壊しても行き場を失ったマナは大聖杯に戻ってしまう。そして、聖杯はアンリ・マユに汚されている」

「そう。だからわたしたちが大聖杯を壊すか、聖杯が願望機としての役割を果たすかしない限り、延々と聖杯戦争は続くことになる。」

「ただ、聖杯を壊せば溜まっていたマナが大聖杯に全て戻ってしまうから聖杯を壊すわけにもいかない。しかし、誰かが聖杯を完全に発動させてしまえば、アンリ・マユは復活し、人類滅亡の危機に瀕するかも知れない」

「……責任重大だな」

「……ええ」

「ただそれではつきりしたわけだ。」

「これで俺たちがこの聖杯戦争を黙って見守るわけにもいかなくなっただけだ」

「そういうことになるわね」

「なら、さっきも言ったように俺たちは全力を出し切れるように今は万全の準備を整えるのみだ」

「いい心構えね。それでこそわたしのパートナーにふさわしいわ」

「ああ。とにかく聖杯戦争が始まるにあたって必要なことは今日中に済ましちまったほうがいいな」

「ええ。そうと決めればさっそくはじめましょう」

「そうだな。でもまあその前に、お茶のおかわりをもってくるか」

「あっ、わたしのお願い」

こうして二人の第6次聖杯戦争は幕をあげたのだった。

理想

「なあ遠坂、今回は誰を召喚するつもりなんだ」

聖杯戦争が始まるとなると、最も大切となるのがサーヴァントの召喚だ。

「セイバーに決まってるじゃない」

「なっ！！待ってくれ、セイバーは俺が召喚するから、遠坂は他の人してくれないか」

「嫌よ。セイバーは士郎が召喚するよりもわたしが召喚した方が絶対がいいもの」

「なんでさ？俺は前回のセイバーのマスターなんだから当然今回だって俺が召喚するべきだろ」

「それを言うなら、わたしもセイバーのマスターだったわよ。それに、わたしがセイバーのマスターになったからわたしたちが前回の聖杯戦争の勝者になったんじゃない」

「うっ。確かにそうかもしれないが、やっぱりセイバーのマスターだけは譲れない」

「ふざけるのもいいかげんにしなさいよ。さっきも言ったように今回の聖杯戦争は絶対に負けるわけにはいかないの。セイバーはわたし召喚するわ」

「いくら相手が遠坂でもそれはさせない。遠坂がどうしても言うなら、こつちにだつて考えがある」

「なによ。言ってみなさいよ」

「遠坂の分の聖遺物は投影しない。それに、俺はお前の彼氏はやめて、聖杯戦争が終わつたら世界中の困つてる人を助けるべく、旅に出ることにする」

それほど俺の決意は固い。

「つく！卑怯よ、士郎！！」

「卑怯でもかまわない。それでも俺はセイバーのマスターだけは譲れないんだ」

「なによ、なによ。セイバー、セイバーって。わたしのことなんてどうでもいいのね」

遠坂はそっぽを向いたまま顔もあわせてくれない。

「なんでさ？俺の一番は天地がひっくり返つても遠坂だ。俺は誰よりも遠坂を愛している」

「そんなの、言葉ではなんとも言えるわよ。どうせアンタがセイバーを召喚したら、セイバーは士郎にべつたりで、アンタはセイバーにべつたりになるじゃない」

そうかそれが遠坂の本音だな。

「遠坂、俺の一番は遠坂だって言ってるだろ。俺がセイバーを召喚してもそれは絶対に変わらない」

「わたしがアンタにとっての一番なら、士郎はどうしてセイバーにこだわるのよ」

「俺がセイバーにこだわっているのは、なにも遠坂よりセイバーのほうが好きだからってわけでは決していない。俺は前回の聖杯戦争でセイバーに何度も助けられた。だけど、俺はセイバーに何一つしてやることができなかつた。自分のことで精一杯だつたっていうのは単なる言い訳にすぎないと思う。俺はセイバーの抱える苦悩を何一つ解決してあげてないんだ。もちろん、遠坂だってセイバーの苦悩の正体には気づいていないと思う。だけど、その苦悩を和らげてあげることができるのは同じ悩みを抱き続けてきた俺しかいないと思うんだ。なにもそれは遠坂がセイバーの気持ちをわかつてないと言っているわけじゃない。遠坂が、セイバーのことを大切な存在だと思ってることは俺が一番わかっている。それでも、俺が自身の理想を信じる限り、セイバーを放っておくことはできないんだ。すべての人を助けたい、できることなら誰にも死んでほしくない。そんなことを願うのは、偽善だつてことぐらいはアーチャーと戦う前からわかつてた。それでも、俺は自身の理想を信じて、アイツに勝った。だから、同じ理想を抱いているセイバーを放っておくわけにはいかない。セイバーの抱いている理想は、俺のものよりも歪なんだ。彼女から直接聞いたわけじゃないけど、俺は彼女の理想を知っている。あの丘の上で、理想のために己が身を犠牲にした彼女の姿を知っている。彼女の理想は偽善に他ならない。それでも俺が彼女の理想を否定するわけにはいかない。彼女が抱いた理想は決して間違つてなどない。間違っているのは、理想のために何かを犠牲にしようとする考えだ。自身を犠牲にして、他者を救ったところでそれは全員を救ったことにはならない。自分という犠牲者が生まれる。そのことに俺

は今まで気づかなかつた。自分はいないものだと思つていたから。自身の命なんて他者の命に比べたら無いに等しかつた。だけど、それは間違つた考えだとあの戦いを通して識ることができた。遠坂凜というかけがえの無い存在ができたことで俺の考えは間違つていたんだと思ひ知らされた。俺が死んではだめなんだということを、俺は死にたくないんだということを、俺は生きていたいんだということを思い知らされた。俺が死んだら、遠坂を悲しませることになる。そして遠坂を幸せにしてやることができなくなる。そんなの嫌だ。だから、俺は簡単に死ぬことなんてできない。俺は遠坂のおかげでそれに気づくことができたんだ。そして今度は、俺が手にしたこの感情を、セイバーに俺自身の力で伝える番なんだ。この大切な感情を一生忘れないために、俺がセイバーに伝えなきゃ意味がないんだ。同じ理想を抱いて、同じ苦悩を抱える者として、俺が伝えなければいけないんだ。そのためには、セイバーのマスターでなければ駄目なんだ。頼む遠坂、俺が無理なことを言つてることがわかつてる。それでもセイバーのマスターだけは譲れない。俺にセイバーのマスターをやらせてほしい」

「衛宮くん。あなたにセイバーを任せて、セイバーを泣かせるなんて結果になつたら許さないわよ」

この言葉に対する返答が最終試験つてわけだな。

「遠坂、その言葉にはうんとは頷けない」

「……………」

「俺はセイバーを泣かせてみせる。とびっきりの嬉し涙を、アイツには流させてやりたい。それが、今まで頑張つて来た彼女へのせめてもの報いってヤツだろう?」

遠坂はしばし無言のまま俺を真剣なまなざしで見つめていた。

「いいわ。合格よ。アンタをセイバーのマスターとして認めてあげる。そのかわり、失敗は許されないわ」

「ああ、わかってる。俺は遠坂と違って、大事なところで失敗をしたりなんかしないからな」

「さっきの言葉、取り消すわよ」

「取り消したって、俺はセイバーを召喚するからな」

「……もう、勝手にしなさいよ」

そう言う遠坂の言葉には棘がなかった。俺への信頼と、遠坂なりのエール気持ちが詰まった優しい言葉だった。

相手

「それで、遠坂は誰を召喚するつもりなんだ？」

「アンタにセイバーを譲ったから、まだ決まってないわよ」

心底不満そうに遠坂はそう答えた。

「俺はセイバーのマスターを譲るつもりはないぞ」

「わかってるわよ。そうね、ランサーにしようかな」

「アーチャーじゃないのか？」

「アンタね、アーチャーを召喚するわけないでしょ」

「俺今、口にだしてたか？」

「口で言っただけでも、顔に書いてあるわよ」

「うっ。そりゃどうしようもない。」

「でもどうしてアーチャーにしないんだ？なんだかんだ言って、遠坂とアーチャーは息が合ってたたる」

遠坂はため息をつき、答えた。

「アンタはわたしがアーチャーを召喚していいわけ？」

そりゃよくないけど……

「それに、魂の起源は同じでも、前回召喚したアーチャーと今回召喚するアーチャーは全く別の存在なのよ。そんなヤツを召喚したら、またアンタ達は殺し合いをはじめめるでしょ」

言われてみればその通りだ。

「悪い。俺が浅はかだった」

「分かったのなら、もうその話はいいわ。それより、わたしはランサーを召喚しようと思うんだけど、士郎はどう思う？」

ランサーか……

「いいんじゃないか。アイツけっこう……いいヤツだったし」

そう言う俺の顔を、遠坂はじつとのぞき込んできた。

「あれ？士郎もしかして焼餅焼いてる？」

「なっ。そんなことはないぞ、決して……」

「そう？でも少しは妬いてくれてるんでしょ」

卑怯な……。頬をうつすら赤らめながらそう聞かれたら、本当のことを言わざるを得ないだろ。

「……………ああ。そうだよ」

「えへへ。けっこう嬉しいかな……」

……遠坂、その反応は反則だ。

「でも、アンタだってセイバーを召喚するんだから、わたしがランサーを召喚することぐらい我慢しなさい」

「そっ……そうだな」

セイバーを引き合いに出されては、そう答えるしかなかった。

「ところで、士郎」

「なにさ？」

「なんで士郎の周りにはかわいい女の子が多いのよ」

遠坂の突然の言葉に、俺は言葉を失ってしまった。

買い物

「しかし、沢山買ったな」

「そうね。最近は食事も2人か3人の時が多かったから、あまり買
い物をしなくても済んだのよね」

「そうだな。でもまあ、俺は賑やかの方がいいかな……」

聖杯戦争の話が一段落ついた後、俺たちはご近所の商店街で買
物をした。聖杯戦争が始まってしまえば、買い物なんて行ってる暇
はあまりないだろうということで、食材やら生活用品を思いつく限
り片っ端から買っていったのだが、気がつく俺の両手は大変なこ
とになっていた。まあ、聖杯戦争の話が終わって、なぜか遠坂に俺
の周りの女の子がかわいいことについて詰問され、困り果てた挙げ
句に無理矢理買い物に連れ出したので、遠坂の荷物が軽いことに
ついては何も言えないのだが……。

「そつえばさ、士郎。藤村先生なんだけど、この先1週間くらい
は来てもらわない方がいいわね」

「ああ。それなら、メールを打っておいたよ。『藤ねえも年度初め
はいろいろ忙しいだろうからこれから1週間くらいはそのまま家に
帰りなよ』って送ったら、『なんか、お姉ちゃん避けられてるみた
いで淋しいけど、士郎の言葉に甘えることにする』って返ってきた
から藤ねえなら大丈夫だと思う」

「……アンタ、そういうことは本当に気が利くわね」

なんか、褒められてる気がしないのは気のせいかな？

「藤ねえは前回の聖杯戦争に巻き込まれたからな。今回まで危険な目に遭わせるわけにはいかないんだ」

身内の存在というのは聖杯戦争では弱点となりうる。前回の聖杯戦争では、キャスターにそこを突かれて痛い目にあつた。同じ失敗を繰り返すわけにはいかない。

「士郎も少しはマスターとしての自覚があるのね」

「当たり前だろ。俺たちは絶対にこの聖杯戦争で勝ち残らないといけないんだ。それに、家族を危険な目に遭わすわけにもいかないだろ」

俺は遠坂の方に顔を向けた。

「もちろん、遠坂も俺の家族の内に入ってるからな」

言った。言っちゃった。たぶん俺の顔は真っ赤になっているに違いない。

「それなら、絶対に無茶はしないように」

「うっ……痛いところ突くな、遠坂」

「どうせアンタのことだから、無茶するなって言っただって無駄なこととは分かってるけど、わたしのことを本当に大切に想ってくれてるなら、絶対に死ぬんじゃないわよ」

「ああ。分かっているさ。俺は死なないし、遠坂も死なせない。そして、救える人は全員救ってみせる」

それこそが俺の理想。偽善だって言われようと、俺はこの理想を生涯貫いてみせる。そしてこの聖杯戦争を、その第一歩としてみせる。

「まあ、そのためにもまずはサーヴァントの召喚をしなきゃならないんだが、召喚ってどうやるんだ？」

「はあ？」

睨まれた。

「いやだからさ、俺は正規の召喚の仕方を知らないんだ。だからその、教えてくれるとありがたいんだが……」

「そうだった。アンタは儀式もせずにセイバーを召喚したんだっただわね」

「うっ……すまん」

「謝ってどうするのよ。まあ、ぶっちゃけると儀式に必要なものは魔法陣と聖遺物と呪文詠唱だけだから、士郎は聖遺物の投影と短い呪文を覚えてくれるだけでいいのよね。魔法陣はわたしが描くから」

「そうか、それなら安心だな。……ところで、召喚用の聖遺物って投影品でもいいのか？」

「いいのかって、そんなことわたしにも分からないわよ。それでも、

今から聖遺物を集めるわけにもいかないんだから、投影品を使うしかないじゃない」

確かにそうだ。

「わかった。それなら俺はできるだけオリジナルに近いものになるように努力するよ」

「ええ。その辺は士郎を信じるわ」

「ああ。まかせとけ」

そうこう話している内に俺たちは衛宮邸に戻ってきた。さて、聖杯戦争の準備を本格的にはじめるとしますか。

召喚

町に点在する人工の明かりが一つ、また一つと消えていき、深遠な闇が辺りを覆い始める。

深夜1時、静寂が町を支配するなかで、一画のみ張り裂けんばかりの緊迫した空気を纏う空間があった。

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ

繰り返すつどに五度

ただ満たされる刻を破却する」

衛宮邸内、中庭の中心に一人の青年が月の光に照らされ、立っている。

「同調開始」

彼の言葉に反応するように、辺りの木々達がざわめきだす。

「告げる

汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に
聖杯の寄るべに従い

この意、この理に従うならば答えよ」

魔力の奔流が青年の軀を襲う。それでも彼は、伝説の騎士王との再会を確信し、さらなる詠唱を紡ぎだす。

「我は常世総ての善と成る者
我は常世総ての悪を敷く者」

一陣の風が舞う。刻は満ちた。

「汝三大の言霊を纏う七天

抑止の輪より来たれ

天秤の守り手よ」

「問おう。貴方が、私のマスターか」

闇を弾く声で、彼女は言った。

セイバー（？）

「問おう。貴方が、私のマスターか」

闇を弾く声で、彼女は言った。

「ああ。俺が君のマスターだ、セイバー」

「召喚に従い参上した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある」

俺は固唾を飲んで彼女の次の言葉を待つ。そして……

「ここに契約は完了した。………お久しぶりです、シロウ」

俺のよく知るセイバーが目の前に立っていた。

「会いたかった。………セイバー」

「私もです。………シロウ」

そのまま、二人で抱擁を交わす。

「……………」

気づくと、俺の後ろの空気がギンギンに冷え切っていた。

「あんたら、いつまでそうしてるわけ？」

……「っ、怖い。」

「いやっ、すまんセイバー。つい……」

「いえ、その私こそシロウの姿を見たら、体が勝手に動いてしまってます……」

……遠坂の視線が痛い。

「……で、いつまでそうしてるわけ？」

これは、まずい。とっさに俺たちは体を離れた。

「凜、会いたかった。シロウも凜も元気そうだなによりです」

「ええ。そうね。貴方もマスターとの距離をずいぶん縮められたようだなによりだわ」

「っ……この空気はまじでやばい……」

「まあ、何がともあれセイバーの召喚には成功したみたいだな」

「そのようね。衛宮くんが思わずセイバーに抱きついてしまうほど、手応えのある召喚だったようね」

……逃げ場がない。

「……まあ、今回だけは大目に見てあげるわ。わたしもセイバーに会えて嬉しいし」

「……凜」

よかった。なんとか、俺は死なずに済むようだ。まあ、遠坂とセイバーは結構仲がよかったしな。セイバーに感謝といったところか……。

「そういうわけだからセイバー、これからよろしくね。今回の聖杯戦争は、前回以上に貴女の力が必要なのだ」

「ええ。確かにこの聖杯戦争はどこか歪だ。嫌な予感がしてならないのです」

セイバーのクラスの直感は、未来予知に近い能力である。ゆえに、セイバーが感じている嫌な予感は、簡単には看過できない。

「やはり貴女もそう感じるのね。詳しい話は後ですけど、この聖杯戦争は未知の部分が非常に多いのよ。なにが起こるか、わたしには想像もつかないわ」

「そうですね。それでも、私が召喚された限りは貴方がたに必ずや勝利をもたらしましょう」

「そうですね。期待しているわ」

「ええ。必ず貴女がたの期待に応えてみせます」

セイバーの言葉は自信に満ちあふれていた。

「本当にセイバーなんだな」

「シロウ、どうしたのですか」

「いや、ここにいるセイバーはあのとときのセイバーと同じなんだな
と思っただけ」

「……………」

「そういえばそうね。英霊って、座にある本体から呼び寄せられる
分身のようなものって聞いたから、人格は毎回違うものだと思うっ
ただ」

「ええ。私は普通の英霊ではないのです。英霊となるには代償行為
が必要なのですが、私は自身が英霊となる代わりに、私が生きてい
る内に聖杯を手に入れることを望んだのです。そして、聖杯を手
入れ、私の願いが叶った際は、守護者となることを受け入れると誓
ったのです」

「今の説明だと、セイバーが普通の英霊でないというのがよくわか
らないんだけど」

「はい。死後、守護者として世界に使役されることはよくあること
です。しかし、私は未だに死んでいない。私の人生は、死を迎える
一瞬で止まっているのです」

「……………カムランの丘だな」

セイバーは驚いた表情をする。それも分かる。彼女は前回の聖杯
戦争で最後まで俺に真名を告げなかった。しかし、俺の口から出た
言葉は、彼女の真名を知らなければ出ない言葉だ。

「……シロウ。貴方は私の真名を知っていたのですか」

「いや、知っていたと言えるほど確かだったわけじゃないよ。ただよく、セイバーの過去を夢に見たんだ。だから薄々、セイバーはアーサー王なんじゃないかと思ってた。やっと、今のセイバーの反応を見て、俺の予想が当たってたことを確信した」

「そうですか。私はシロウが言うとおり、アーサー王と名乗り、男と偽ってブリテン王国を治めていました。しかし、最終的にわたしは……」

血塗られた丘。剣と死体の山と化した丘の上で、彼女は誰にも看取られることなく息を引き取った。

「つまり、貴女は生者のまま、世界と仮の契約をして聖杯を求め続けているというわけね」

「……はい」

「それは、貴女が聖杯を手に入れるまで、死ぬことができないことを意味してないかしら」

セイバーは言葉を失った。それこそが、今の遠坂の言葉を肯定したことにつながる。

「ゆえに、貴女は霊体化ができなかった。貴女は英霊として世界に使役されながらも、生者だったから」

セイバーは何も話さない。その沈黙が、全てを語っていた。

セイバー(?) (後書き)

- * - * - * - * -

やっと、セイバー召喚の所まで来ましたね。最初は説明が長々と続いていると思いますが、結構重要な話なのです。

こちらは、サイト開設以来書き続けているSSなのでストックが割とあるんです。なんで、ちよくちよく移設していこうと思います。

さて、私のサイトにて

【2011.03.20】Fate/the arrow of
faith「一歩」更新

しました。(現段階では『すると思います』なんですけど……WWW)
だいぶ時間が空いてしまって申し訳ありませんでした。

セイバー（？）

「セイバー、お前は一度あの丘に戻ったのか？」

「ええ。私の聖剣により聖杯を破壊した後、私はあの丘に戻りました。そして、最期を迎えようと思っていました。しかし、世界は私を許してくれようとはしなかった。刻は決して進むことなく、私はまたシロウと呼ばれて、この時代に来ました」

「そうか。しかし、セイバーも前回の聖杯戦争の記憶があるならば、もう聖杯は汚れてしまっていることを知っているはずだ。ならばお前は、何を求めてここに来た」

「シロウ、それは貴方であれば私に聞かなくても分かるはずだ。私は聖杯を破壊しに来ました」

答えは分かっていた。しかし、それでは……………

「それではお前が救われない」

セイバーは、聖杯を手に入れない限り、英霊として世界に使役され続ける。それも、永遠に最期を迎えることなく。

「お前が聖杯を破壊するのは、自分で自分を苦しめるのと同じじゃないか。お前は、王として立派に国を治めてきた。しかし、最終的には国を滅ぼすことになってしまった。その責任を取って、お前は国のために自身を世界に捧げるといふ決意をした。そしてお前は俺たちの時代に呼ばれ、聖杯を手に入れるべく戦った。だが、お前が求めていた聖杯は既にアンリ・マユに汚染されていることが分かり、

己の手で破壊することになった。それでも、お前はあの戦いを通して、俺とアーチャーの戦いを通して、気づいたんじゃないのか。自分とは間違っていたと気づいたんじゃないのか。そうでなければ、いくら汚れた聖杯とはいえ、お前が聖杯を壊すわけがないだろう。セイバーは、聖杯を諦めて、前に進むことを選んだはずだ。それにもかかわらず、世界がお前を許さなかったと。それに加え、お前は聖杯を破壊すべくこの時代に再び来たのだ。……ふざけるな。なぜ今まで苦しみ続けてきたお前が、これ以上の苦しみを与えられなければならぬんだ。そんなのおかしいだろ。お前が報われないなんて、そんなの間違ってる」

「……シロウ。貴方の気持ちは嬉しい。しかし、それでも私は聖杯を破壊する。私が聖杯を手に入れることよりも、貴方達の住むこの世界を守る方が大切ですから」

前の俺なら、ここで黙ってしまったと思う。しかし、今の俺は違う。

「お前はそれでいいのか、セイバー？」

「え？」

「それで本当にいいのかと俺は聞いているんだ」

「はい。私は、貴方達の住む世界を守る。そのために聖杯を破壊することを躊躇うことはありません」

「そうか。ならば、今すぐ遠坂と契約をし直せ」

「……………どういう意味だ」

セイバーの口調が、男のように厳しいものとなる。それでも俺は怯まない。

「そのままの意味だ。そのほうが、この戦いを勝ち抜くためには効率的だ」

「ふざけるな。私を裏切るつもりか、シロウ!!」

「俺はお前を裏切つてなどいないはずだ。本来、聖杯を手に入れるべくマスターはサーヴァントと契約を結ぶ。しかし、お前は聖杯を破壊するためにこの戦いに望むのだろうか？それならば、お前との契約は無効だ。守る必要もあるまい」

「何を言うか。私はシロウの剣としてこの聖杯戦争を戦い抜くと誓ったのだ。聖杯など関係ない」

「それならば尚更だ。別にお前が遠坂のサーヴァントになったって、俺の剣として戦えないわけではない。それはセイバーの好きにすればいい」

「なぜそのようなことを言うのです、シロウ!!」

セイバーは今までに見たことのないくらい激怒している。

「お前のことが大切だからだよ!!」

セイバーは俺の言葉に呆気にとられ、立ちつくした。

「俺と遠坂にとって、お前は大切な存在なんだよ。そんなお前が俺

たちのために自身を傷つけながら戦ってる姿を見て、嬉しいわけがないだろうが。お前もアーチャーを見て感じただろ。自己を犠牲にしてまで守護者となったにもかかわらず、後悔しか残っていない男の姿を見て、違和感を感じただろ。今のお前はアーチャーと何も変わらない。そんなヤツのマスターなんか俺はなりたくない。アイツを思い出すのは御免だからな」

今のセイバーを見ていると腹が立つ。自分のことなど諦めきつて、他者の犠牲になることで自分を慰めているセイバーなど、俺が許せるはずがない。

「それならば、私はどうすればいいのですか!?!」

セイバーは顔を上げず、泣き声で叫ぶように俺に感情をぶつけた。

「それでいいんだ」

「……………」

「そうやって、俺に想いをぶつけてくれればいいんだ。俺に言えないことは、遠坂に言ってくれてもいい。ただお前が一人で辛い思いをする必要はないんだ。たとえ、お前の未来が絶望的であっても、まだ決定したわけじゃないだろう。それにもかかわらずお前はもう諦めてしまっている。それが許せないんだよ。お前は何の努力もしていないじゃないか。俺たちもお前にもしてあげていないじゃないか。それなのに諦めるのか。まだどうなるかも分からないのに、諦めてしまうのか。それは、間違ってる。少しでも可能性があるのなら、運命にだって抗うべきだろ。どんなに勝ち目のない戦いでも、戦いが終わるまで戦場を駆け抜けるのが騎士ってもんだろ。騎士王であるお前が、戦いを放棄していいのか。そんな王には、部下

は失望するだろうな」

「……シロウ」

「王だけでは国は治められない。それは、セイバー自身が誰よりも知っているはずだ。信頼できる臣下がいてこそ、王は王たりうる。俺じゃあ役不足かもしれないが、セイバーが俺のことを信頼してくれていることを信じてるし、俺もお前を信頼してる。だから、少しは俺たちを頼れよ。なんでもかんでも自分一人で解決しようとするなよ。そんなの悲しいじゃないか。お前が俺の剣なら、俺はお前の鞘になるって思ってるんだからさ」

「シロウ。やはり私のマスターは貴方しかない。剣と鞘は常に共にあるべきだ。私のマスターとして、この聖杯戦争に参加してくださいませんか、シロウ」

「ああ。セイバーがセイバー自身のためにこの戦いに参加するって言うのだったら、俺は喜んでお前のマスターをやるよ」

「はい。まだシロウの言葉を全て受け入れられたわけではありませんが、私は私自身のためにこの戦いに参加する。そして、納得いく答えを見つつけたいと思っています」

「分かった。それならば、改めて俺のサーヴァントとなってくれ、セイバー」

「喜んでお引き受けしましょう。マスター」

「……………」

「……………」

「遠坂が見てたら怒るだろうな」

「そうですね。凜がいたら怒るでしょうね」

「わたしはここにいるけど」

俺たちの後ろには、宝石を構えた赤い悪魔が仁王立ちしていました。

「……………許してください」

「謝るくらいなら、私の召喚の準備を手伝いなさいよ」

「……………はい」

セイバー(?) (後書き)

- * - * - * - * -

【2011.03.20】 Fate/the arrow of
faith」一歩「更新

惚気

「遠坂、後は何をすればいい？」

俺とセイバーは、半ば脅迫され、遠坂の召喚準備の手伝いをして
いる。まあ、自業自得なわけだが……………

「そうね。こんなもんでいいわ。ありがとう。……………あっ、もう一つ
だけお願いしていい？」

「ん？なんだ？」

「強化つて、剣以外にもできるわよね？」

「ああ。得意ではないけど、最近は失敗することも少なくなってきた
と思うぞ」

「そう。それなら、強化をお願いしていい？」

遠坂、やけに殊勝だな。

「いいぞ。それで、何に強化をかければいいんだ？」

俺がそういうと、遠坂は急に顔を真っ赤にして、消え入るような
声で呟いた。

「……………スカート」

今、俺の理性を奪いかねない単語を聞いたような……………

「はい？」

「……………」

とりあえず、聞き直してみよう。さっき聞こえたのは、何かの間違いだろうから。

「もう一回言ってくれるか？」

「スカート」

「なんでさ？」

ただいま、俺の脳は真っ白です。

「だから、スカートを強化してって言ってるの。召喚中に捲れたら嫌でしょ。今日わたし、ブルマとか履いてないし」

「いや、だからといって強化は……………」

「なによ。別にスカートを強化するぐらい恥ずかしいことなんて何も無いじゃない」

確かに、遠坂とは既にそれなりの関係を築いているわけだが…………

「いいのか？」

「いいのよ。早くやってちょうだい……！」

むっ。このまま俺が躊躇していると、遠坂にガンドでも撃たれかねない。

「わかったよ」

意を決して、俺は遠坂のスカートに手を伸ばした。

「きゃっ！……ちょっと、何するのよ！……」

「何するって、スカートに強化しろって言ったのは遠坂じゃないか」

「確かにそう言ったわよ。だけど何？この怪しい手は」

「手って、スカートに触れなきゃ強化できないだろうが」

「なっ。強化ぐらい物に触れずにやりなさいよ」

それは無理な話だ。

「俺にはそんなことできない。そこまで言っただったら、自分でやればいいじゃないか。遠坂だって強化ぐらい使えるだろ」

「嫌よ。確かにやってやれないわけじゃないけど……」

「なんでさ？」

「別に、召喚中にアンタの魔力を感じていたいって思ってもいいじゃない！……」

凄い剣幕で、遠坂はそう叫んだ。

「えっと、その気持ちは実に……なんとというか、嬉しいんだが……」

遠坂は我に返ったのか、顔を赤らめ、そっぽを向いて言った。

「とにかく、士郎に強化をしてほしいのよ」

遠坂にそんな声でそんなことを言われてしまったては、断れる男子はこの世にはいないと思う。

「わかったよ。それじゃあ、俺のズボンを取ってくるから、それを履いてスカートを脱いでくれ」

………というか、

「なあ、遠坂がズボンを履けばいいんじゃないのか？」

遠坂はポカンとしている。

「どうなんだ？」

「……嫌よ。それだと、調子が狂うわ」

「なんだよ、それ」

「もう、わかったわよ。触っていいわよ。わたしのスカートを触ってもいいから、早く強化をけなさいよ」

それは飛躍しすぎてないか。

「ちょっと待った。それはいくらなんでも違うだろ」

「何も変わらないわよ。ほら、早くしなさい」

触ってもいいと言われると、なんだか触り辛い。

「……………」

「さっきはニヤニヤしながら触ろうとしてたくせに」

「なっ。そんなことないぞ。遠坂のスカートに触るくらい今更なんだっていうんだ」

「なんかそれはそれで腹が立つわね。ほら、いいから早くしなさい」

「わかった。……………やるぞ」

そして俺は恐る恐る、遠坂のスカートに手を伸ばした。遠坂は抵抗しなかった。

「……………」

俺たちはしばらくの間、お互いに見つめ合っていた。突如、背後から殺気を感じ振り返った。

「シロウ、凜、その格好はなんですか？」

見ると、武装をしたセイバーが剣を構えて立っていた。

「貴方がたは、いったい何をしているのですか」

そこには遠坂のスカートを触りながら固まっている俺の姿があった。

「強化の練習だ」「強化の練習よ」

俺たちは開き直っていた。

「言い訳は聞きません!!」

瞬間、俺たちは神々しいまでに眩い光に包まれた。

凜さまとランサー

「嬢ちゃんがオレを呼んだマスターか？」

漆黒の闇の中、青の槍使いが赤の魔術師に問い掛ける。

「そうよ。これからよろしく、ランサー」

「まあ、嬢ちゃんなら文句はないぜ。そこの坊主はオレに文句がありそうだがな」

相手にすればからかわれる。ここは黙って置くのがベストだろう。

「そんなことよりも坊主、ヤツとの決着はついたのか」

ランサーがいうヤツとは、おそらくアーチャーのことだろう。そう言えば、ランサーは俺とアーチャーの死闘の結果を知らないんだっただな。

「ああ。俺がアイツを倒した」

「そいつはよかった。坊主と嬢ちゃんに蟠りがあると、こっちもやりにくいからな」

「ちょっと待ってランサー、アンタ前回の聖杯戦争の記憶があるの？」

遠坂が慌てて会話に入ってきた。

「あるぜ」

「どづいうことよ。アンタもセイバーみたいに輪を外れた英霊なわけ？」

「違うな。オレは普通の英霊だ。だが、なんつうか前回の聖杯戦争の記憶は残ってるけどな」

「なら、アンタはあのときのランサーと同一人物ってわけか」

「まあ、そづいうことだな」

「どづいうことなの？」

遠坂は相当混乱しているようだ。

「オレにはよく分からないけどな、一つ言えることはオレがまだ座に戻っていないってことだ」

普通、特定の時代に召喚された英霊は、自分の意志云々とは関係なく、魂が一旦座に戻る事になっている。しかし、どづやらランサーの魂はこの時代に残っていたようだ。

「それは関係ないわ。ランサーの魂が座に戻ろうが戻るまいが、召喚されるランサーは座から呼び出されるはずだもの」

「普通だったら嬢ちゃんの言うとおりかもな。しかし嬢ちゃん、オレを呼ぶときの触媒が特殊だったろ？」

ランサーを召喚する際に使った触媒は、俺が投影したゲイボルクだ。

「このゲイボルクにはおかしなところはないはずなんだけど……」

投影した際の感触は、最高の物だった。

「いや、小僧の投影は完璧だろうさ。オレが言いたいのは、そのゲイボルクが坊主の投影した物だからオレが呼ばれたってことだ」

「わからないな。俺はランサーの使ってたゲイボルクを、なるべく本物に近づけて投影したつもりなんだけど……」

「そうか。そういうことね」

どうやら、遠坂が謎を解いたようだ。

「分かったのか？」

「ええ。おそらく原因は士郎の投影でしょうね」

「なんでさ？」

「理由は簡単よ。アンタは誰を思い浮かべてゲイボルクを投影した？」

「もちろんランサーだけど……」

「そのランサーって、アンタが二度殺されそうになって、キャスタ達を倒す際にわたしたちが協力関係を結んだランサーのことよね」

「ああ。俺が思い浮かべたゲイボルクの持ち主はそのランサーの間違いないけど……」

「ランサー、貴方もそのランサーで間違いないわね」

「そういうことだ。嬢ちゃん達が召喚したのは、英霊としてのオレそのものではなく、第5次聖杯戦争に参加したオレってわけだ」

なるほど、それなら納得がいく。疑問も解決したところで一言呟いてから、ランサーは次の言葉を放った。

「ともかくだ。嬢ちゃんならマスターとして不足はない。オレが存在する限り、嬢ちゃんのサーヴァントとしてこの聖杯戦争を戦い抜くことを誓うぜ」

「ええ。わたしのほうからもお願いするわ」

「よし。契約は完了した。あとの細かいことはいらさないだろ」

「そうね。士郎もそれでいい？」

「……………」

黙ってる俺を見て、ランサーは笑い出した。

「おもしれえな坊主。安心しろよ。オレは嬢ちゃんに手を出したりしねえよ」

……………やっぱりコイツ、気に入くわない。

「オマエさんらの仲を壊すとしたら、オレじゃなくそのセイバーを警戒すべきなんじゃないか？」

「どついう意味です、ランサー！！」

突然話を振られ、セイバーは怒り出した。

「貴様は、その坊主のことが好きだろ？」

「なっ！！……シロウはマスターであって、決してそのような感情を抱いていない」

「アンタらね。わたしはセイバーが士郎のことが好きでもかまわないわよ。というか、そんなこととつくに気づいてたし。それに、いくらセイバーとはいえ士郎は渡さないから」

さりげなく遠坂は俺の脳天を突き破る発言をしてくれやがった。

「ホントおもしれえなオマエらは。こりゃ、退屈しないかもな」

実に満足げな表情のランサーが、俺たちを見つめていた。

荒野

そこは見覚えのある風景だった。

「ここに来るのも2ヶ月ぶりか」

一面の荒野に、無数に刺さる名剣の数々。燃えさかる炎と空間に回る歯車。

「俺の世界なんだよな」

衛宮士郎の心象世界。魔術師はこの世界のことを固有結界と呼ぶ。魔術の中でも大禁呪であるとされ、協会に見つかれば間違いなく封印指定を受けるほどの大魔術である。

「固有結界か」

俺は自身が固有結界を有していることに第5次聖杯戦争を通して気づいた。その戦いでアーチャーとして現界した英霊エミヤシロウ。ヤツとの戦いを通して、俺はこの心象世界を理解し、足を踏み入れた。

《なぜ貴様はここにいる》

荒野の先に一人の男の姿があった。白髪に茶色の肌をして赤い外套を纏った長身の男。

「お前が呼んだんじゃないのか？」

衛宮士郎の未来の姿、英霊エミヤシロウ。

《知らないな。貴様が勝手に来たのであろう。そもそも、オレが貴様に自分から会いに来るはずがなかるうが。今も理想を貫き、偽善を続けている貴様など目障りにもほどがある》

相変わらず、会うだけで腑が煮えくり返るほどムカツク野郎だ。

「俺も自分から来たわけではない。迷い込んだだけだ」

《はっ。もし、貴様が自分から来たなど言えば、オレは今すぐ貴様を殺すだろっさ》

そう言つとヤツは俺に背を向け、歩き出す。

《理想を抱くのならば、対岸まで泳ぎ切つて見せる》

ヤツはそれだけを言い残し、立ち去った。

「言われなくてもわかつてるさ。お前が叶えられずにあきらめた夢は、俺と遠坂が必ず叶えてみせる。たとえ偽善だと罵られようとも、俺は自分の理想を貫いてみせるさ」

強い決意を胸に、俺は自身の世界を後にした。そして、遠坂のいる現実の世界で第6次聖杯戦争二日目の朝を迎えた。

朝の鍛錬

「……………ん」

窓から差し込んできた日差しで目を覚ました。

「……………よつと。まだ5時半か」

外を見ると日が昇ったばかりなのか、まだ仄かに薄暗かった。

「さてと、朝ご飯の準備をするかな」

と、その前に日課である朝の筋トレを行うべくジャージをもって道場へ足を運ぶ。

「さてと、手早く済ませますか」

軽く気合いを入れて、俺は道場に足を踏み入れた。

すると、どうやら先客がいたようだ。セイバーが道場の奥で行儀正しく正座していた。

「おや、シロウですか」

俺の気配に気づいたのか、セイバーはこちらの方に振り返って微笑みかけた。不覚にも、そんな彼女の可憐な仕草にドキリとしてしまった。

「どうしたんだ、セイバー。こんな朝早く」

俺の内心をセイバーに悟られぬようにすぐに話題を切り替えた。

「どうやら今回のシロウの召喚は成功したようで、ラインが繋がっているようです。そのため体調がよすぎて、今日は早めに目を覚ましてしまいました」

「そうか。そう言えば、俺の魔力が少しセイバーの方に流れている気がするかも」

「ええ。前はシロウが私を召喚した瞬間にラインを閉じてしまったみたいなので上手く繋がらなかったみたいですね。しかし今回はシロウから魔力が供給されている」

前回の聖杯戦争では、ランサーに追われている最中にどういうわけかセイバーの召喚に成功した。しかし、その召喚が不完全だったために多くの障害を残してしまったのだった。

「ラインが繋がっていて本当によかった。えっとそれなら、霊体化はできるのか？」

「……いえ、私は一応生者という位置づけなので、霊体化はできないのです」

やはり、遠坂が言ったことは間違っていなかったようだ。

「まあ、それは仕方がないな。それに、俺はその方がセイバーを近くに感じられて嬉しいかな」

「私が霊体化できないのは変えられないことなので、シロウにそう

言ってもらえるのは嬉しいですね」

「それなら何よりだ。ところで、俺は少しばかり筋トレをしに来たんだが、道場の端を使ってもいいか？」

「筋トレですか。それならば、せっかくですから私と剣を合わせますか？朝ご飯もあるので、そんなに激しくはできませんが」

願ってもいないセイバーの申し出に俺は即答する。

「それは是非ともお願いしたい。セイバーがいなくなってから、あまり剣を振るう機会がなかったから腕は落ちているだろうけど、聖杯戦争に向けて少しでも相手と立ち合えるようにしたい」

何しろ世界の命運が俺たちにかかっているのだ。少しでも強くなるのであれば何だってするぐらいの気概をもっているつもりだ。

「わかりました。では、はじめましょうか。もちろん容赦はしませんよ」

「臨むところだ。思いっきり来い！！」

1時間後、俺はボロボロになった体を携えて、ストレスの発散をしてお満悦の腹へこ王様を今度は舌で満足させるべく台所で次なる戦いを始めたのだった。

始動

「坊主の料理、うまいな」

現在時刻は、7時を少しまわったところ。俺と遠坂、セイバーそしてランサーも加わって朝の食卓を囲んでいる。

「この味は実に久しぶりです。やはりシロウの料理はおいしい」

こくこくと頷きながら幸せそうに食べるセイバー。このような反応をしてくれると作る側としても嬉しい。

「とは言っても、ほとんどパンを焼いただけよね」

呆れ顔で遠坂が答える。

「いえ、このサラダやスープは絶品だ。それにパンの焼き加減も絶妙。さすがはシロウだと思います」

「セイバーの口に合ったようでは何よりだよ」

「この時代には美味しい料理があつたんだな。オレはあの赤くてとにかく辛いヤツしかこつちで食ってねえから軽く感動してるぜ」

ランサーも相当気に入ってくれたようだ。というか、赤くて辛い料理ってなんだ？

「まあ、わたしも士郎の料理は好きだけどね。……ねえ士郎、テレビつけていい？」

「いいぞ。ニュースでも見るのか」

そう言えば、普段はあまり食事中にテレビをつけないよな遠坂は。

「ええ。今日は少し気になるのよね。聖杯戦争も始まったし」

なるほど、民間のニュースでも聖杯戦争の手掛かりが見つかるかも知れないしな。

《昨日深夜11時頃、冬木市においてホテルが全焼するという火事が発生しました。火災により、32人が意識不明で病院に搬送されました。被害のあったいずれの方も目立った外傷はなく、死傷者も今のところは出ていません。被害にあったホテルは、コンクリート造りの7階建ての建物で、出火の原因は現在不明ままです。現場を目撃した方に当局の取材班が話を伺ったところ、現場は火事が発生するまでは何事も起こらず、突然7階建てのビルが一瞬で青い炎包まれたとのこと。その後、消防が駆けつけ消火活動が開始されましたが、炎の勢いは全く衰えず、建物が全焼した後に唐突に火が消え去ったとのこと。警察は事故と放火の両面で捜査を続けて……………》

「なあ遠坂、これって…………」

「サーヴァントの仕業じゃないのか？」

「ええ。ここまで不自然なことが多ければ、間違いなくサーヴァントの仕業ね」

「くそ。もう動き出してきたか」

思ったよりも早く、事態が進展した。

「シロウ、凜、ここは一刻も早く敵を倒すべきだ」

確かに被害者までもが出てしまった。さらなる被害者を出さないためにもすぐに出発するべきではある。

「いや、情報が足らなすぎる。無闇に敵の懐に飛び込むのは危険だ」

前回の聖杯戦争もその場凌ぎの作戦で、何度も失敗をした。やはり、事前の情報なしで戦うのはリスクが多すぎる。

「しかし、シロウ」

セイバーもハイリスクであることは重々承知なのだろう。力のこもった声で訴えかけてくる。

「セイバーの気持ちは分かる。一人でも犠牲者を増やしたくないのは俺も一緒だ。それでも、俺たちがやられちゃったら意味がないだろ？ 出たところ勝負の戦いを仕掛けるのは得策ではないと思う」

「確かに士郎の言うことも一理あるわ。でも、今回はセイバーの方が正しいかも知れないわね」

「そうなのか？ でも、相手が畏でも仕掛けてたらどうするんだ？」

「その可能性は薄いわ。ただ、ないとも言い切れないわね」

「なんでさ？」

遠坂はどこからかメガネを取り出して、説明をはじめた。

「理由は三つ。まず一つ目は、全てのサーヴァントが召喚されてからまだ日が浅いこと。昨日念のため教会に電話をかけて確認したんだけど、一昨日にバーサーカー・アサシン・アーチャー、昨日ライダーとキャスター召喚されたようね。それを考えると罨を張ってあるとしても、あまり強力なものではないはずだわ」

確かに一日や二日では、大規模な結界などは張ることができない。

「二つ目は、炎が建物全体を包んだことよ。もし、サーヴァント同士が戦っていたのならばわざわざ建物全体を火事にする必要はないわ。このサーヴァントとマスターは、生気を吸収して魔力に変換するためにホテルを襲ったのでしょね。その証拠に誰一人死んでいないわ。死んでしまったら、その時点で生気が吸えなくなるもの」

正気じゃないな。人間の生気を魔力に変換するなんて。

「三つ目は、夜のホテルで火災が起こったこと。夜のホテルなら、確実に沢山の人間がいるし、運がよければマスターも滞在しているかも知れないから一石二鳥だわ。それを考えると今夜も動きがある可能性が高いわね」

「なるほどな。つまり、その動いてきたところを狙い討ちにしようってことか」

「そゆこと。憶測に過ぎないけど、サーヴァントに生気を吸わせるほどのマスターだから、たいしたことはないだろうし、早い内に倒さないと相手の魔力が増えていくからね」

「よし、それなら冬木に行くか。鉄は冷めない内に打てだ」

「いいえ。さつきも言ったように敵は夜に動き出す可能性が高いわ。それまでは戦いの準備をしたほうがいいわね」

「ほう。冴えてるな嬢ちゃん。それで、これから何をするんだ？」

感心した様子でランサーが口を開いた。ランサーの満足げな表情から察するに、遠坂と同じことを考えていたのだろう。

「衛宮くんが言うように情報が少なすぎるっていうのも一理あるわ。そこで、多少の情報収集を戦いの前におくべきね」

「では、現場に向かいますか？」

セイバーが落ち着かない様子で尋ねた。

「いいえ。まずは教会に行きましょう。あそこなら何かしらの情報が入っているかも知れないわ。綺礼もいないから、文句は言われな
いと思うし」

聖杯戦争関連の後処理を任されているのは教会だ。教会ならば、
隠された情報が何かしらあるだろう。

「よし。今日の予定は決まりだな」

早くも第6次聖杯戦争は動き出した。そして俺たちもついに始動
する。

思い出

時間もあることだし、教会には徒歩で行こうということになった。ランサーは霊体化している。

「しかし、またこうして3人でこの橋を渡るとは思わなかったな」

「そうねえ。センバーなんてあのおとき黄色いカツパを着せられて……ぷっ」

「凜。あれはシロウが」

「いや、あの鎧姿で街を闊歩するわけにもいかにだろ」

「あれはシロウが悪い。せめてもシロウの服を貸してくれればよかったではありませんか」

「なんだよそれ。セイバーだって、カツパならいって言ったじゃないか」

「それは、シロウがカツパしか私に選択肢を与えなかったから仕方なくですね」

「あははっ。ホント傑作よね。甲冑の上に黄色いカツパって、逆に目立つじゃない」

「まあ、なんだかんだでセイバーに似合ってたし、かわいかったからいいんじゃないか？」

セイバーは顔を真っ赤にして反論してくる。

「なんですかそれは。いいはずがないでしょう!」

「あらそう? セイバーだってあのとき文句一つ言わなかったわよ。今更士郎を責めるのもひどいんじゃない?」

「そうだぞセイバー。それに、今となってはいい思い出じゃないか」

「これ以上は私に対する侮辱と取りますよ」

「うわっ。本気で怒ってる。」

「ごめん。悪かったよセイバー」

「そうね。少し言い過ぎたわ」

「分かればいいのです。もう、あれは忘れてください」

まあ、何とかセイバーが聖剣を使うことは回避されたようだ。

「でも、そう簡単にあの姿は忘れられないわね」

遠坂、懲りてないし……

「それに、セイバーもこのままじゃ気が済まないでしょ」

……なんか、嫌な予感がする。

「そうですね。シロウは、幾度となく私を辱めていますからね」

二人の視線が突き刺さる。

「セイバー、わたしにいい考えがあるんだけど」

やばい……

「なんででしょう?」

これは、絶望的だ。

「士郎がセイバーに新しい洋服を選んであげるのはどうかしら? それなら、士郎もリベンジになるわけだし、セイバーも納得がいくでしょ? もちろん士郎のおごりよ」

「それはいいですね。是非ともそうしたい」

もちろん、拒否権はありませんよね……聞くまでもなく。

教会

「衛宮士郎君がセイバーのマスターで、遠坂凜さんがランサーのマスターでよろしいかな」

二人ではいと答える。

「それでは、お二人を正式なマスターとして登録をいたそう」

登録を手早く済ませ、デニール神父が話し始めた。

「いや、それにしても驚きましたな。こんなにも早く聖杯戦争が再開されるとは、思っても見なかったことですからな」

「ええ。わたしも驚きました。おそらく、わたしたちによって聖杯が破壊されたことにより、行き場を失ったManaが大聖杯に戻ったことでこんなにも周期が早まったのだと思いますが、確証は無いですね」

「なるほど。考えましたな。私らもその線で探ってみることにしましょう」

「ええ。よろしくお願いします」

二人はだいぶ気さくに話している。遠坂も言峰相手とは偉い違いだ。

「ところで、お二人は別の要件があるのではないですか」

さすがに一教会の司祭だけあって、話ができるな。

「鋭いですねデニー口神父。実は冬木のホテル火災の件についてお伺いしたいのですが」

「やはりそうでしたか。あれは、サーヴァントの仕業でしょうな。私ももなるべく裏工作はしたのですが、あれほど派手にやられては隠しきれませんよ」

「どうやら、当たりのようだ。」

「やはりそうですか。どのようなサーヴァントがやったかはわかりますか」

「それは分かりませんな。しかし、対軍宝具を使用したのは間違いないのではないですか」

「まあ、対軍宝具を使うということだけでは有力な情報にはならないな。」

「他に変わったことはありませんか？」

「それがですね。どうやらあの炎には対魔効果があるようですな。それに、水への耐性も備わっている。魔術的にも、物理的にもあの炎を消火するのは困難ですぞ」

「そうですか。それならば、教会側はどのように消火活動を行ったのでしょうか」

デニー口神父は、笑顔を浮かべて答えた。

「いやはや、その質問にはお答えしかねますな。ただ、貴女のことですから、分かって聞いているのでしょうか？」

「いえ、わたしには何のことだか」

とぼけたように振る舞う遠坂。なるほど、わざとリスクが高い質問をすることで、相手の注意を引きつけて、自分の事件に対する関心の深さをアピールしたわけか。

「どうやら貴女方にとってこの聖杯戦争は特別なようですな。分かりました。少しだけ、私らの持つ機密情報をお教えしましょう。私の感じたところ炎の対魔力はCランクといったところでしょうか。並の魔術では歯が立ちませんね。それが建物全体に広がっています。だから、局所集中をすればその対魔力はB以上になるかもしれません。侮れん相手ですよ。それに、彼らは火力や炎の形を自由に操れるようですな。と、ここまでですか。これ以上の情報はさすがの私も教えることはできませんぞ」

「ええ。わたしも充分満足いたしましたからそのくらいで結構ですよ。それで、わたしのサーヴァントですが、前回の聖杯戦争も参加しています。どうやら前回の聖杯戦争の記憶が残っているようで、珍しいケースの召喚になってしまいました」

魔術師同士の取引では等価交換が基本だ。さすがは遠坂、抜かりがない。

「参りましたな。そのような情報を出されてはおつりを払わなければなりませんかな」

「いいえ。これ以上聞き出してしまえば、わたしのほうが提供できる情報がなくなってしまうから」

「ははは。分かりました。では、それはまたの機会に取っておきましょう。それでは、お二人とも何かありましたら、またこの教会におとずれてくださいな」

「ありがとうございます、デニーロ神父。神父もお体にお気をつけて」

「ええ。お二人とも健闘を祈りますぞ」

「はい、頑張ります」

「ほほ。息はぴったりのようですね。将来が楽しみですよ」

そんな神父の言葉に二人で頬を赤く染めていた。本物の神父様に言われると、妙に意識しちゃうよな。

教会（後書き）

- * - * - * - * -

まだ、ストックはあります。

あるんですけど、二日置きぐらいの不定期連載になるかもしれない。

ちょっと忙しくなってきたんで……

自サイトで言うところの、

6th Heaven's Feel【中編】

に後何話かで突入します。

あとがきのこともちよつとずつ書いていきますね。

残骸

「ここで火事が起こったのか」

教会を出た俺たちは、火災のあった現場に来ていた。

「これはひどいですね」

被害にあつたホテルは、原型すら留めておらず瓦礫の山と化していた。死者が出なかつたことが奇跡と思われるほど跡形もなく、残骸だけがそこにあつた。

「これは異様な風景としか言いようがねえよな。よくもまあ、ここまで派手にやつたもんだぜ」

もう一つ、この場所が明らかに異質と言える要素があつた。

「本当よね。これだけホテルが灼け崩れてるといふのにその周りの建物は焼け跡一つ付いてないなんて……」

まるでホテルの残骸を見下ろすかのように、周りのビルは平然と並立している。焼け跡だけがぽっかりとあいた穴のように存在し、余計に周りからは断絶された空気を纏つて見えた。

「これほど目立つのに、世間はあまり騒がないんだな」

「その辺は、教会がなんとかしてるんでしょ。ここには結界が張つてあるし、普通人には認識障害が働くようね」

見回すと、マスコミの姿は既になく、人々も通常通りの動きをしている。

「しかし、考えたもんだぜ。ここまで無茶苦茶に壊されちまうと証拠があまり残らねえ」

「ええ。このマスター、なかなか頭の切れるヤツだわ。派手な行動を起こした割には、自分たちが不利になるような手掛かりを全く残していない。雑魚かと思つてたけど、警戒を厳しくする必要があるわね」

その場凌ぎにしかならず、暴拳とも思えた敵の行動だが、現場の検証を続ける内に、実に緻密に計算された計画的な犯行であることが判明した。

「くそつ。人を傷つけながらも、それが理にかなつてるなんて」

「そうね。わたしも、コイツら戦い方は最低だと思つわ。それでも、これが最善の手であるということも否定はできない」

聖杯戦争とは、七人のマスターとそのサーヴァント達が命を賭して一つの聖杯をめくり殺し合う儀式である。そこに、人間の常識や慈悲などは通用しない。

「シロウ、このままですとこのマスターは更に強くなる。それに、次に犠牲が出ることになるやも知れない」

「ああ。早い内にコイツらを無力化しなければ、取り返しのつかない事態になりかねないからな」

「そうね。だから今日は今後を占う意味でも、勝負の一日となるわね」

今宵、四人を待ち受ける結末は生か死か。戦いの火蓋が切って落とされる。

胎動　　Side　Sakura

「あなたは誰？」

わたしは、彼に向かって問いかけた。しかし、彼からの返事はない。

「あなたは、わたしの中で何をしているの？」

すると彼はわたしの方を向いた。

《外に出たい》

彼自身が口にしたわけではないが、そんな思いがわたしの中に入り込んできた。とても強い思いだった。

「あなたはどうして、外に出たいの？」

わたしは彼に、そう尋ねた。そして彼は再び思いをぶつけてきた。

《外に出たい》

彼の答えはわたしの質問に対する答えにはなっていなかった。だけれどわたしは彼の言葉で、彼が外に出ること以外望んでいないことを理解した。

「あなたは誰なの？」

彼は、わたしの方を向いたまま黙っていた。

《外に出たい》

わたしも彼を見つめて黙っている。

《外に出たい》

沈黙が続く。

《外に出たい》

わたしも彼も話はしていない。

《外に出たい》

それなのに、わたしの心には彼の想いが津波となって押し寄せてくる。

《外に出たい》

騒音が鳴り響く。

《外に出たい》

彼の想いに押しつぶされそうになる。

《外に出たい》

わたしは彼に消されるのかも知れない。

胎動 〽Side Sakura〽 (後書き)

私のサイトでいうFFPP 6th Heavens Feel

中編に突入です!!

ついに戦いの火蓋が切って落とされます!!

我が儘

俺たちは、新都の火災現場を訪れた後、遠坂たちの買い物に付き合っつて、今ボーリング場にいる。

「なあ、セイバー」

昼頃からボーリングをはじめたわけだが……

「む、シロウは勝ち逃げをするような人だったんですね」

既に7ゲームを終え、8ゲーム目がはじまるうとしている。

「いいじゃない。セイバーも気に入ってくれたみたいだし」

ボーリングに行こうと遠坂が言い出したときに止めなかった俺はバカだと思う。

「坊主、そろそろ負けてやったらどうだ」

ランサーが二人には聞こえないような小声でそつとつぶやいた。

「できることならやつてるわ」

手加減して負けようとするれば、二人は本気で怒るのだ。ものすごい剣幕で責められたら、真剣にやらざるをえない。

「シロウ、なにをしているのです」

セイバーは、次のゲームをやりたくてうずうずしている。しかしながら、女の子の買物に付き合った後にボーリングを7ゲームである。俺の体力はもはや限界だ。この後に敵との戦闘があると思うとぞっとする。

「いや。もう終わりにしよう、セイバー。ここで体力を使い果たして、もう戦えませんかって状態になったら本末転倒だからさ」

「そうやってシロウは逃げるのですね」

セイバーは実に不満げな顔をした。

「逃げてない。確かにセイバーはまだ疲れてないかも知れないけど、俺や遠坂のような生身の人間にはちよつとばかりしつらいんだよ。今日は終わりにしよう。そのかわり、またみんなでここに来よう」

俺がそう言うと、セイバーは寂しそうな顔をして押し黙ってしまった。

「だめか？」

「あと1ゲームだけでもいいのです。だから続きを……」

セイバーは必死にそう訴えてきた。

「どうして、セイバーはそんなにゲームを続けることにこだわるんだ？俺の言葉を理解してくれてないわけではないんだろっ？」

「それは……」

再びセイバーは沈黙した。すると遠坂が声をあげた。

「セイバーはこれがわたしたちと遊ぶ最後の機会だと思っているのよね」

遠坂の言葉に、セイバーは驚いた表情をした。

「凜、私は……」

「凶星よね」

遠坂に言葉を切られ、セイバーは言い返せない。

「貴女はサーヴァントだから、聖杯戦争が終わればこの世界からはいなくなる。そうなる前に、せめてもの思い出をこの世界でつくりたいと思った。そうでしょう?」

「……………」

セイバーは完全に言葉を失ってしまった。しかし、遠坂の言葉を否定しないところを見るとセイバーがこの世界で思い出をつくりたいと思っているのは確かなようだ。

「セイバーが俺たちとの思い出をつくりたいと思ってくれているのなら、尚更今日のところはボーリングを終わりにしよう」

セイバーが俺たちとの時間を大切に思ってくれていることはすごく嬉しい。でも、その前提に俺たちとの別れがあることが悲しかった。だから、俺はここに誓う。

「聖杯戦争が終わったなら、またみんなでここに来よう」

決して叶わないはずの夢。それでも俺はこの夢をあきらめない。

「そのときはいくらでもセイバーのわがままに付き合っつて約束する」

セイバーからの答えはなかった。それでも、セイバーが少しずつ自分のことを考えるようになってきたのは確かだと思う。まだ聖杯戦争は始まったばかりだ。セイバーがいくら否定しようとも、俺はこの約束を絶対に守ってみせる。

感知

「嬢ちゃん、敵だ」

異変は突如現われた。

「タイミングがいいわね。これは幸先がいいわ」

ボウリング場を後にし、今俺たちは新都の見回りをしていた。

「セイバー、相手の場所はわかるか？」

「ええ。微弱ではありますが、敵は魔術を使用したみたいですね。おそらく、大規模な魔術の発動に必要な準備を行なったのだと思います。ですから、魔術が使用された場所に行けば敵と遭遇する可能性は大きいかと」

なるほど、先程から甘い香りが漂いだしたのはそれだったのか。

「よし。すぐに行こう」

「はい」

セイバーが返事をする、俺たちは一斉に走りだした。疾風のごとく、夜の新都を駆け抜ける。

「ついに始まるわね」

生きるか死ぬかの殺し合い。恐くはないと言えば、それは嘘だ。

しかし、体は高揚感に満ちている。

「坊主、戦いの準備はできてるんだろっな」

「ああ。この戦いは負けられない。敵には容赦しないし、犠牲は絶対にはださない」

正義の味方として、偽善だと罵られようが、俺は全ての人を救ってみせる。

「容赦しないっつうのと、犠牲はださないっつうのは矛盾してるぜ」

必ず生まれるはずの犠牲は確かに存在する。自分を殺してくる敵の存在は、救うわけには行かない。情けをかければそれは容赦のない戦いではなくなり、相手を排除することは犠牲が生まれるということにつながる。

「わかっているさ。相手を殺す気概で臨まなければ、俺が殺される。それでも、俺は犠牲をださないことをあきらめない。どんなに不可能なことでも、正義の味方を目指すかぎり、一人たりとも死なせはしない」

殺さずとも皆を救うことは不可能ではないはずだ。それがたとえ奇跡と呼ばれるものでも、俺は希求し続ける。英雄エミヤと同じ運命を辿らないように、衛宮士郎は衛宮士郎の道を歩む。

「はっ。考えは甘い、オレは坊主みたいなヤツは好きだぜ」

「ランサーに好かれても嬉しくないな」

「ちげえねえ。坊主は嬢ちゃんにぞっこんだしな」

「なっ!!」

「違うのか?」

コイツ、やっぱり腹が立つ。

「まあ、嬢ちゃんも坊主の虜になってるみてえだし、相思相愛ってところか」

「アンタね。これから戦いなんだから少しは緊張感を持ちなさいよ」

「顔を真っ赤にしてるヤツに言われたかねえなあ。なあ、嬢ちゃん」

遠坂の顔は紅潮していて、俺と目が合うなり顔を伏せてしまった。それを見るなりランサーが言った。

「オマエら惚気てんな」

「なんでさ?」

というか、なぜそう繋がる。

「こりゃ、誰から見ても惚気だろ」

「そんなことないわよ。ねえ、セイバー」

「早く行きますよ。敵に逃げられます」

どしどしサイバーちゃん立腹です。なんでね？

感知（後書き）

プチご無沙汰です。

最近、TBSGサイト（自サイト）の方では更新ができてなくて、だめですねえー！。

まあ、やる気がないわけじゃないんですけど、要するにスランプです。

でも、TBSGでは干莫氏（こちらではブラックサレナ氏）の『変わらないのはわたしも同じで』（Fate短編連載、恋愛ギャグ、士凜）の7話目がアップされたんで、是非読みにきてください。

そして、いつのまにやらお気に入り小説登録してくださった方も増えていて感動しました。FFPPもいかげん続きを書かないとなあ……。

ホテル ｝side ????

side ????

夜空には曇雲がたちこめ、漆黒の闇が辺りを包み込む。オフィス街は静寂に支配され、閑散とした路地に冷たい風が吹き抜けている。その一画において、異質な光景が展開されていた。

「ふはははは。よいぞ。よい炎ぞ」

冬木ビジネスホテルと呼ばれる大きくはないが決して小さくもないビル全体が燃え盛る灼熱の炎に覆われていた。

「さすがでございます。私めもこのように美しい炎はついぞ見たことがありません」

男が言うように、その光景はまさに圧巻だった。火災現場の間を切り取り、別の空間に貼りつけたかのようにホテルだけが真っ赤な炎で燦然と輝いていた。芸術と言っても過言ではない程、神々しく美しい、そして人々を魅了してやまない恐怖がそこにはあった。

「今宵の酒と女はさぞ美味かろうぞ」

そのホテル内部一階のフロントには、豪勢な衣装を纏った男がソファーに座り、その背後に中肉中背の男が控えていた。

「お酒の用意はできております。お持ちしますか」

ソファ―に座る男に、背後の男がそう問いかける。

「まだ良い。それよりもあの女はまだなのか」

「ただいま着替えをさせておりますので、今しばらくお待ちください」

「遅いぞ。直ちに連れて参れ」

「はっ。ただいま」

慌てて背後の男が化粧室に向かう。そして中に向かって叫んだ。

「遅い。いったい何をしている。陛下がお待ちであるぞ」

しかし中からはいつこうに返事がない。

「出てこないならば入るぞ。早くしろ」

すると、控え目に化粧室のドアが開いた。男が強引に女の腕を掴み外へ引きずり出す。

「いやっ。やめて」

「黙れ。小娘が！！付いてこい。陛下がお待ちだ」

「いやだ。やめて」

猶も抵抗を続ける女に対して、男は空いている手で杖を取り出し女に向って振りかざした。

「Gel?hmt en Muskeln」

瞬間、女の体はぐったりと倒れこんだ。男は、倒れた彼女を抱えあげソファアに座る男の元へ歩いて行く。

「陛下。お待ちせいたしました。女を連れて参りました」

ソファアの男は、女の肢体を一通り見回すと女に向かって言葉を発した。

「なんと美しい。やはり私の眼は確かであったか。素晴らしいぞ。ほれ、私の隣に座らんか」

「やめて。いやだ」

女は必死に声を張り上げるが、体を動かすことができず、為す術もなくソファアに座らせられる。

「今宵は宴だ。じっくりと愉しむことにしようぞ」

8組のマスターとサーヴァント達の殺し合いという饗宴が今まさに始まるうとしていた。

side ???? end

ホテル \ side ??? (後書き)

- * - * - * - * - * - * -

活動報告のほうでも書きましたが、ずいぶん更新が久しぶりになつたしまいました。まだストックはありますので、ちよつとずつ更新していきます。

自サイトで更新を続けているのはとりあえずAFだけですが、FFPPも更新できたらしていきます。その時は、こちらでもお伝えします。

さて、ここからきのかさんの世界に、私の世界の侵食が進んでいくと思います。

というのは、オリキャラが登場してしまうからなんですよね。

オリキャラには賛否両論あるのは、至極承知しております。

実際、私もSSでのオリキャラには否定的ですしね。まあ、それでもオリキャラありのSSへの私なりの挑戦というか、私なりの型月ワールドの理想形を表現するための一手段として上手く機能させられたらいいなと思つてます。

正直、リスペクトしてやまない型月作品に私のオリキャラを混ぜてSSを書いていくのは気がひけるんですけどね。まあ、AFも書いてますし、こちらはこの路線でつてことで！SS自体が、原作にメスを入れていく行為ですし、なんとか読者の方々が不快にならないように気をつけながら好き勝手やっていきます！！

トラウマ

そこだけが別世界だった。

「なんなのよ。これ」

目の前の建物だけが、燃え上がっていた。周りのビルには一切火が燃え移ることなく、周囲の干渉も全く受けていない。その相互干渉さで一層建物の不気味さは増し、異質な空間を形成していた。

「これは一筋縄では行きそうにもありませんね」

小規模ではあるが、ビルの周囲に張られている結界は精巧かつ強力なものである。また俺が解析するかぎりには、炎の威力は強大で優れた抗魔力を備えていた。

「坊主、顔が青ざめてるぜ。大丈夫か？」

ランサーの指摘通り、俺は極度の緊張状態にあった。

「ああ。大丈夫だ。すぐに突入するぞ」

「嘘をいいなさい。アンタ震えているじゃないの！」

確かに遠坂の言う通り、さっきから震えが止まらなかった。

「いったいどうしたのです、シロウ」

原因は分かっていた。

「悪い。戦いが怖いわけではないんだ。だけど、火事を目の前にすると足がどうしても動かない」

十年前の冬木市史上最大最悪の大火災。その災禍に少年時代の俺の姿があつた。目の前には、凄惨な風景が広がっていた。肌が焼け爛れ、助けを求めて手を伸ばす者。生前は赤ん坊であつただろう肉塊を抱えて助けを求める女。道を見渡せば死体の山ができていた。

「あの火事は聖杯が起こしたことは頭では理解してる。それでも、誰にも手を差し伸べられずに、ただ自分が生きるために歩き続けることしかできなかつた自分がもどかしい」

何度も助けてと声をかけられた。道行く人々に何度も手を差し出された。俺はその声を、その手を無視することしかできなかつた。

「今でもあの火事のことを夢に見ることがある。そのたびにあのときの恐怖が甦る。あのとき何もできずに孤独であるしかなかった自分の姿が脳裏に焼き付いて離れない」

あの火事の中にいた人々のほとんどが死んでいく中、俺は生き残つた。俺が切嗣と出会えたことはまさに奇跡だつた。

「シロウ、あの火事はアンリマユがおこしたものです。あなたや当時の私のマスターも誰一人として間違つた者はいない。あれがあの場合では最善策だつたと私は思います」

確かにそうかもしれない。それでも、俺は正義の味方を志す者として当時の俺は不甲斐なかつたと思うし、一生心に背負っていかなければならぬ枷であると受け止めている。

「セイバーの言う通り、あの火事は誰の所為でもないのかもしい。それでも、俺が助けを求める者達にしてやれることはあったと思う。それを無視して最終的には俺は生き残った。そのことを俺は一生心にとめておかなければならないと思うし、今この世で生を全うしていることに感謝をしなければいけないと思う」

だからこそ、多くの命を失ったあの景色を目の当たりにすると、全身に恐怖が駆けめぐる。

「俺のこの震えは、一生俺が忘れてはならない感情が表に現れたものだ。ただそれでも、二度とあのような光景が起こらないようにするために、俺がここで立ち竦んでなんかいられない」

今、過去との楔を断ち切る試練が訪れているのである。この第六次聖杯戦争は、セイバーのためでも遠坂のためでもない、俺自身のための戦いなのだ。

「いくぞ。俺はこんな恐怖には負けない」

そして俺は、紅蓮の地獄の中に一步を踏み出した。

トラウマ(後書き)

- * - * - * - * - * -

前の話、Enterキー押す作業忘れてました。まあ、そのお詫び(?)も兼ねてさっそく更新っ。

明日というか今日あたりから、「電車で執筆作戦」も復活させようかなあ……。

更新する楽しさに身を委ねてどんどんストックがなくなっていくと自分の首が絞まるわけですし、FFPPの執筆も進めないといつまで経ってもロンドン編なんて夢の夢ですしね……。

あー、構想だけは先まで進んでいるのに……それを形に出来ない自分の筆力のなさが憎い……憎すぎる。

よっしゃー、頑張ります。

とはいえ、聖杯戦争においては、狂気に満ちることは強ち悪いことではない。寧ろ、バーサーカーのサーヴァントの存在が示すように狂気は時として脅威となる。

「ふははははははは。愉快だ。実に愉快だ。マスターとサーヴァントの諸君。少しは我を愉しませてくれよ」

「こちらを甘く見てもらっちゃ困るわね。Anfang」

疾風のごとく迫り来る火炎を、遠坂は水系の魔術で鮮やかに対処する。

「このような攻撃であれば私の抗魔力で突破できます。シロウは後方支援を」

「わかった」

「はっ。コイツはオレだけで十分だ。オメエらは休んでな」

セイバーとランサーが二手に分かれ火柱へと突っ込んで行った。俺は自分に出来る最大限の援護を展開する。

「 投影開始」

投影は自分との戦いでもある

「 創造理念、鑑定」

自分の剣が相手を倒すイメージ

「基本骨子、想定」

自分の理念が、現実には侵蝕されることは許されない

「仮定完了。是、即無也」

炎弾

「熾天覆う七つの円環」

かつてトロイア戦争において、大英雄の投擲を防いだという、七重、皮張りの盾。俺が投影した盾は四枚であるが、不完全ながらもその強度はオリジナルにも劣らない。一枚一枚が古の城壁に匹敵する光り輝く四枚の花弁は、相手の炎弾を無力化させた。

「くっ」

ネロの攻撃をなんとか回避することに成功した。しかし、今の投影により、俺は魔力の半分以上を消費してしまった。それでも、半分で済んだのは、遠坂の指導があったからこそかもしれない。

「ほお。貴様らも少しはやるようだな。では、本気で行くでしょうぞ」

分散していた部屋中の炎が一ヶ所に集約される。その形状は、巨大な球体で、まるで太陽のように厳然と浮遊していた。

「おい坊主、あれを防ぐ自信はあるか？」

今度放たれる炎弾は先程のものとは比べものにならないほどの威力をもつ。もはや、俺の投影では全く歯が立たない。

「いや、あそこまで大きいと無理だな。でも、手はある」

ネロは、ホテル全体に結界を張り、空間自体を支配している。い

くらネロの攻撃をやり過ぎたところで、ネロの魔力が尽きない限り追撃が止むことはない。さらに、ネロは結界内においては炎を駆使して空間移動魔法を使いこなす。つまり、俺たちの攻撃は相手に届くことはない。それでも、相手に対抗できる切り札が俺たちには残っている。

「俺が固有結界を発動する。そうすれば、ヤツの結界は俺の世界に塗り潰されて、効果をなくすはずだ。その瞬間に、セイバーの宝具で勝負を決める」

いくら相手の結界が強力であっても、大元のが塗り替えられてしまえば、無力化できる。そうなれば、キャスターを圧倒することができるはずだ。

「それはだめよ。士郎の固有結界は不完全なの。まだ使うには早すぎる。もし無理矢理にでも固有結界を行使すれば、士郎の体が壊れる可能性があるわ」

前回の聖杯戦争の際には、ギルガメッシュに対抗するための最終手段として、俺が固有結界を使用することが認められた。しかし、今回のキャスター戦は俺たちにとつての初戦であり、手の内を見せるには早すぎる。それにこの戦いは、他マスターが監視をしている可能性が高い。俺が固有結界を展開することは非常にリスクが高い。

「確かに遠坂の言うことにも一理ある。それでも今はそんな使うわないを議論できるほどの余裕はないだろ。やらなければやられる。この戦いは遊びじゃないんだぞ」

「わかってるわよ。それでも今アンタが固有結界を展開すれば、マスターだけでなく協会や聖堂教会が敵になる可能性もあるのよ。い

くらなんでも危険すぎるわ。ここは、わたしの持つ宝石でなんとか持ちこたえる。だから三人は、そのまま突破して相手のマスターを始末して」

マスターを失ったサーヴァントは次の契約者を見つけない限り消滅する。そのため、常人を逸した存在であるサーヴァントを倒すよりも、その契約者であるマスターを叩くほうが遥かに容易である。ゆえに、サーヴァントは狙わずマスターを潰すことが聖杯戦争のセオリーとされてきた。

「いくら遠坂でも、あの炎には太刀打ちできない。それにたとえ遠坂が相手の攻撃を受けきれたとしても、俺はマスターを殺しはしない」

たとえ敵であっても、人間は絶対に殺さない。偽善だと罵られようが俺はその理想を追い続ける。それが、正義の味方を目指す者として、最低限の義務であると俺は信じている。

「なら士郎は休んで。セイバー・ランサー、準備はいい？」

「ちょっと待って遠坂！！俺が固有結界を使って活路を見いだすからその……………くあ」

瞬間、目の前が真っ白になった。体の力が抜け、脱力感が全身を支配する。

「遠坂……………なにを……………」

遠坂は俺を一瞥したのち、相手の炎に視線を移した。

「土郎へ供給していた魔力をカットしたわ。それとともに、土郎の体内に循環していた魔力を吸収して、完全に魔力を断ち切ったわ。もうアンタは、動くのも辛いはずよ。わたしたちが決着をつけるから、アンタはそこでおとなしく見ていなさい」

体を動かそうにも、指一本まともに力が入らない。立っているのが精一杯だった。

「遠坂、おまえは！！くそっ………どうして」

「くははは、どうやら貴様らの覚悟は決まったようだな。茶番は終わりだ。この一発で、終焉とすることにしようぞ」

真っ赤に燃え上がる巨大な炎弾が、轟音を立てながら俺たちに迫る。遠坂は、宝石を構え、迫る炎の正面に向かう。そして、遠坂が放った宝石は爆音を放ち虹色に爆発したが、炎弾の勢いはいっこうに衰えない。炎は遠坂を飲み込もうとしていた。

衝動

世界は静寂に支配された。先程まで部屋中で暴走していた灼熱の炎も、充満していた煙の匂いも跡形もなく消え去っていた。

「遠坂……」

一瞬前、遠坂は眼前に迫る炎弾を消滅させることができなかった。炎弾は無防備な遠坂に直撃しようとしていた。

「……どうということなの？」

しかし、炎弾は遠坂に衝突することはなかった。当たる直前、突如として炎弾は消失した。残り香さえも一切が消え去り、部屋には漆黒の闇が再び侵食を始めていた。

「おかしいですね。嫌な予感がします」

セイバーは直感Aのスキルを擁する。セイバーの予感は、ほぼ確実に的中するのである。

《ドグウォンガガガガ》

突然、階下から轟音が地響きとともに鳴り響いた。

「なんだか知らねえが、音は下から聞こえてくるぜ。どうする、嬢ちゃん？」

「そうね、セイバーの直感が正しいのならば少し様子を見るのが正

解かしらね。ただ、黙って見ていられない人達しかわたしの周りにはいないのよね」

俺もセイバーもランサーも、先程から落ち着きがなくなっている。当の遠坂でさえ、はやる気持ちを抑えきれしていない。

「では凜、私とランサーは先に地下へ向かいます。シロウには下級英霊並みの戦闘能力があるとはいえ、警戒を怠らず、私達を追ってください。何かあれば、必ず令呪を使うように。いいですね？」

「ええ、了解したわ。セイバー達も、ヤバイと判断したらすぐに戻ってくるのよ。状況は随時、ラインを通じて伝えてちょうだい」

二人は軽く返答を返し、颯爽と走り去った。その場には俺と遠坂だけが取り残された。

「遠坂、俺はおまえが死ぬかと思ったぞ」

ネロの放った炎弾が、奇跡的にも遠坂に直撃する直前に消滅したからいいものの、そのまま当たっていたら今頃は俺は最愛の人物を永遠に失うことになっていただろう。

「悪かったわよ。でも、なんとかなかったじゃない。アンタが固有結界を使うまでもなかったでしょ？」

「遠坂、それは結果論であって、そんなことで片付く問題じゃない。あの時おまえは死んでいたかもしれないんだぞ。遠坂の命と引き換えにこの戦いに勝つても、俺は全然嬉しくない」

俺にとって遠坂は、自分の命よりも大切な存在である。遠坂の

いない世界などもはや考えられない。

「衛宮くんは人のことが言えるわけ？」

遠坂は声を震わせながらでそう呟いた。

「……なんでさ？」

遠坂が俺を衛宮くんと呼ぶのは、俺をからかうときか、大事な話をするときかのどつちかである。先程遠坂は衛宮くんと言った。だから、遠坂が傷付かない返答をしようとも思った。しかし、そうはしなかった。俺が遠坂を大切に思う気持ちは本物だ。だからこそ、遠坂が危険な目に遭うことを許すわけにはいかない。

「わたしだつて、アンタが死にそうな目に遭う度に心臓が止まってしまうかと思うくらい心配するのよ。それが今までに何回あったと思う？もうわたしの魔術じゃあアンタを生き返らせることなんてできないの。士郎が死んでしまったらわたしはどうすればいいのよ。アーチャーにもアンタを幸せにするって誓ったんだから、自分から死に行くんじゃないわよ。少しはわたしを頼りなさいよ。わたしだつて魔術師なの。死の覚悟はとくに済ませているわ。それなのに士郎はすぐ身代わりになるうとするじゃない。そんなの、優しさではなく傲りよ。わたしがなんのために士郎の彼女になったと思ってるの？それをよく考えなさい」

遠坂は終始顔を合わせてくれなかった。

「ごめん。確かに遠坂が言う通り、俺は慢っていたのかもしれない。それでも、遠坂の命が大切だというのは譲れない」

この答えが遠坂にとって正解ではないことは分かる。ただこれは、正義の味方を志す俺にとって、決して曲げることができないことだ。俺は誰一人犠牲者を出さないために全力を尽くす。そして俺自身も絶対に生き残る。

「まあいいわ。少しは反省したみたいだから、今日のところは許してあげる。それに、そんなこと言われたら許さざるをえないじゃないかい」

遠坂はそっぽを向いてそう言った。遠坂の声からは先程まであった刺は消えていた。

視界

《シロウ、聞こえますか》

セイバーの意思が、ラインが通して伝わってきた。

「セイバー。何かあったのか？」

《ええ、急いで駆け付けてみれば、驚くべき光景が広がっていました。わたしの視界にリンクしてください。そのほうが説明するより早いかと》

「わかった」

セイバーの視点に意識を移行した。セイバーが言う通り、そこには目を疑う景色が広がっていた。

まず、視界に入ってきたのは先程まで俺たちと戦っていたキャスターとそのマスターの悲惨たる姿だった。キャスターの宝石がちりばめられた豪華絢爛な衣装は肩口から斜めにざっくりと引き裂かれ、露出した肌は剣で抉られ、全身が血液で紅く染まっていた。その隣で蹲っているキャスターのマスターは右腕を失っていた。服の袖口からは大量の血が流れ出しており、出血を止めようと朦朧とした意識下で必死に魔術を唱えようとしている。その二人の後方、地下駐車場に不自然に置かれたソファアの上に、純白のウェディングドレスを身に纏い、片腕について横たわる女性の姿があった。

「綾子!!!」

確かに遠坂が言うように、女性の顔は美綴そのものであった。美綴は、学園では見たことがないほどの恐怖の表情を浮かべていた。凄惨な光景の中で非常に浮いていた美綴であるが、さらに場違いな人物が存在した。

「……………イリヤスフィール」

美しい銀髪を携え、雪のように白い肌の少女は見違はずもなく、イリヤスフィール「フォン」アインツベルンその人であった。しかし、イリヤスフィールは前回の聖杯戦争でギルガメッシュに心臓を抉り取られて死んだはずだ。今この場に彼女が現れるはずない。

「士郎、貴方があの場所に行くのはまずいわ」

イリヤスフィールとの面識は全くなかったにも関わらず、彼女は初めて会ったときから俺のことを知っていた。そして、俺たちを殺すことに何のためらいもなかった。むしろ彼女は俺を殺すことに意味を見出だしていたように思う。

「たとえイリヤスフィールが俺の命を狙っているのだとしても、俺は行くよ。美綴を見捨てるなんてことは俺にはできない」

美綴がどうしてあの場にいるのかはわからない。それでも俺は美綴とあらゆる問題を解決することを約束した。今ここで逃げたしまえば、美綴に会わせる顔がなくなってしまう気がする。

《確かにシロウの気持ちも分かります。しかし相手が悪すぎる。ここは一旦引くべきだと思います》

今セイバーとラインを共有しているため、セイバーの想いが深

く俺に浸透してくる。同じように俺の気持ちもセイバーに伝わっているのだろう。

「悪いな。遠坂、セイバー。もう俺の決意は固まったよ」

キャスター、美綴、イリヤスフィール、バーサーカー。あの場に行けば自分の身が危ないということはわかる。しかし、そこには救わなければならない人物がいる。それにイリヤスフィールとバーサーカーともいずれば戦わなくてはならないのだ。それが早まったと考えれば、今も後もたいした差はない。

「まあそれでこそ士郎といったところかしら。ねえ、セイバー」

今更気付いたが、遠坂はランサーとラインを繋がず、俺とラインを繋いだようだ。俺の心理状態も駄々漏れである。

《ええ。頑固なところは相変わらずです》

セイバーや遠坂のほうが頑固だと思う。

《シロウ、何か言いました？》

「衛宮くん、何か言った？」

何も言ってません。

視界（後書き）

- * - * - * - * -

A Fも久しぶりに更新したということ、こちらでもストックをアップしてみました。

F F P Pはストックを消費していく一方で、サイトのほうは全然更新してないんですね。まあ、行き詰ったわけなんですけど・・・。

んで、サイトの最新の更新はこちら

【2011.10.12】A F 2月8日 3・Nexus「微睡眠」更新

しかし、Zeroのアニメは素晴らしい！僕も波に乗りたいですね！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4410r/>

Fate/for the permanent peace

2011年10月13日15時45分発行